

史跡高遠城跡二ノ丸便所建設事業②

史跡 高遠城跡二ノ丸Ⅲ

埋蔵文化財緊急発掘調査報告書

1996. 3

高遠町教育委員会

史跡高遠城跡二ノ丸便所建設事業②

史跡 高遠城跡二ノ丸Ⅲ

埋蔵文化財緊急発掘調査報告書

1996. 3

高遠町教育委員会



上、鉄軸碗 (No-598、17C後葉)

下、鉄軸碗 (No-611、17C後葉)

目 次

口 絵

目 次

挿図目次

表 目 次

図版目次

発刊にあたって

例 言

第 I 章 発掘調査の経緯	1
第 1 節 発掘調査に至るまでの経過	1
第 2 節 調査会の組織	1
第 3 節 発掘調査の経過(調査日誌から)	2
第 II 章 史跡高遠城跡の環境	8
第 1 節 高遠城跡の位置と周辺の遺跡分布	8
第 2 節 高遠城跡の地形及び地質	10
第 3 節 歴史的環境	15
第 III 章 調査結果と遺構の保護	16
第 1 節 調査の概要	21
第 2 節 遺構とその保護	22
第 3 節 遺 物	47
ま と め	64
あ と が き	66
参 考 文 献	66
写 真 図 版	68

挿 図 目 次

第1図	高遠城跡の位置図	8
第2図	高遠城跡の地形及び周辺の遺跡分布図	9
第3図	高遠城跡の地形・地質図	10
第4図	高遠城跡の地質断面図(第3図中A-B)	10
第5図	高遠城跡①地点テフラ柱状図	12
第6図	高遠城跡①地点テフラの砂粒成分比グラフ	12
第7図	高遠城跡テフラ総合柱状図	13
第8図	発掘調査箇所位置図	16
第9図	発掘調査状況見取図並びに工事実施に伴う遺構保存計画図	17
第10図	便所建設予定地発掘調査箇所配置図	17
第11図	発掘調査断面並びに便所建設計画立面図	17
第12図	便所建設予定地平面実測図(第1レベル並びに第2レベル以降)	19
第13図	中村三郎治氏住宅見取図(古老からの聞き取り調査による想像図)	19
第14図	便所建設予定地集石断面実測図(第1レベル)	23
第15図	高遠城跡二ノ丸周辺の土地区画図(昭和初期頃)	23
第16図	便所建設予定地平面実測図(最終レベル)	25
第17図	便所建設予定地遺物出土状況平面図	27
第18図	便所建設予定地断面実測図	29
第19図	便所建設予定地遺物出土状況断面図	29
第20図	管路第1トレンチ平・断面実測図	31
第21図	管路第1トレンチ遺物出土状況平・断面図	31
第22図	管路第2トレンチ平・断面実測図	33
第23図	管路第2トレンチ遺物出土状況平・断面図	33
第24図	管路第3トレンチ平・断面実測図	37
第25図	管路第3トレンチ遺物出土状況平・断面図	37
第26図	高遠城城郭絵図(A・B)	44
第27図	高遠城城郭絵図(C・D)	45
第28図	便所建設予定地出土遺物接合図	46
第29図	発掘調査出土遺物実測図(1)	49
第30図	発掘調査出土遺物実測図(2)	50
第31図	発掘調査出土遺物実測図(3)	51
第32図	発掘調査出土遺物実測図(4)	52
第33図	発掘調査出土遺物実測図(5)	53
第34図	発掘調査出土遺物実測図(6)	54

表 目 次

第1表	高遠城跡①地点テフラ分析結果	12
第2表	高遠城跡②～④地点テフラ分析結果	12
第3表	発掘調査箇所遺構等集計表	17
第4表	管路第2トレンチ47m地点土質試料分析結果	46
第5表	発掘調査出土遺物一覧表	55

図 版 目 次

図版1	高遠城跡の地質関係写真	68
図版2	発掘調査遺物出土状況①	70
図版3	発掘調査遺物出土状況②	71
図版4	発掘調査遺物出土状況③	72
図版5	発掘調査遺物出土状況④	73
図版6	便所建設予定地第1レベル平面	74
図版7	調査地発掘調査前の状況・便所建設予定地調査状況	75
図版8	便所建設予定地調査状況	76
図版9	便所建設予定地調査状況	77
図版10	便所建設予定地調査状況・管路第1トレンチ調査状況	78
図版11	管路第1トレンチ・管路第3トレンチ調査状況	79
図版12	管路第3トレンチ・管路第2トレンチ調査状況	80
図版13	管路第3トレンチ・管路第2トレンチ調査状況	81
図版14	管路第2トレンチ調査状況・汚水管理設工事遺構保存状況	82
図版15	二ノ丸内状況写真・文化11年の銘が彫り込まれた土管	83
図版16	発掘調査出土遺物①	84
図版17	発掘調査出土遺物②	85
図版18	発掘調査出土遺物③	86
図版19	発掘調査出土遺物④	87
図版20	発掘調査出土遺物⑤	88
図版21	発掘調査出土遺物⑥	89
図版22	発掘調査出土遺物⑦	90



完成した便所全景

(平成7年4月撮影)

発刊にあたって

昭和48年5月26日に史跡に指定され、『史跡 高遠城跡』も20年余りが経過してきました。史跡内に4月咲き揃う『タカトオコヒガンザクラ』の樹林は、一足先の昭和35年に長野県の天然記念物として指定を受けており、4～5月の初めにかけて、この短い期間に30万人に及ぶ観光客を一時に受け入れなければならないという特殊事情を抱えております。公園として桜を植え、管理をし、現在に至っているわけですが、これも先人の皆さんの努力によりなし得た偉業であり、敬意を払うと同時に、この貴重な文化財である『史跡』を後世に伝えていくことが、われわれに課せられた責務であると考えます。

さて、保存管理計画並びに整備計画により諸施設を整備すべく努力して行く中で、公園として開放するための必要不可欠の施設として、今回城跡二ノ丸に2棟目の水洗便所を建設したいということから、文化庁に現状変更のお願いをしていく中で、事前に発掘調査を実施し、高遠城の当時のものと思われる遺構を発見したら、それをこわさないようにという条件付きで許可をいただき、この発掘調査を実施しました。

史跡高遠城跡内での発掘調査は、二ノ丸において過去2回実施され3回目を数えます。今回の便所建設予定地は、二ノ丸内の最南端に位置し、汚水管路は建設地を北に向かい、同じく二ノ丸内の最北端まで、この場所には、平成3年度において発掘調査の後建設された女性用の便所があり、二ノ丸を縦断するようにこの汚水管の拵までの、総延長167mにも及ぶ長い管路について調査をおこないました。特に二ノ丸内が東西に二分され、東側が一段高い位置にあったことを証明するように、石垣の基部と思われるような遺構が確認され、平行した格好で難ぎ目を粘土で止めた土管が出土しました。また、管路の中央部から保科氏の時代か、それ以前と思われる、現在遺構として残っている空堀と、違った位置に堀があったことを実証できる、深い落ち込みを確認し、これ以外にも2箇所の落ち込みを確認することができました。しかしながら、幅1mのトレンチの中では全容の解明には足りませんでした。

建設予定地の調査では、二ノ丸外堀の近くであるため、土居の遺構が確認されるのではないかと考えられていましたが、昭和の中頃まで畑・宅地と推移してきた状況からか、残念ながら発見することができませんでした。

また、今回の調査によって確認できた城郭の遺構と思われるものについては、文化庁並びに県教育委員会のご理解をいただき、保護できるような方向で工事を実施することができ、1,043点を数えた遺物については特に陶磁器片が多く、瀬戸・多治見・遠く九州(有田)の著名な先生方にご協力をいただき、何とか調査報告までこぎつけることができました。後日さらに検討が必要なことは言うまでもありませんが、この調査により出土した遺構・遺物等については詳細に記録しました。国の史跡という誇るべき地元の文化財でありながら、まだまだ解明されていない部分が多いのは事実であります。この報告書が後日の研究に役立てられれば幸いに存じます。

この調査にあたり、ご指導をいただいた文化庁・県教育委員会の先生方、出土陶磁器片についていろいろお教えいただいたそれぞれの先生方に、この場を借りてお礼申し上げますとともに、遠く九州まで調査をお願いし、快く引き受けていただいた調査団長の友野良一先生をはじめ、ご苦勞をおかけした調査団の先生方、積極的に作業に参加していただいた作業員の皆さんに、報告書の発刊にあたり心より感謝申し上げます。

平成8年3月

高遠町教育委員会 教育長 山川 廣

例 言

1. 本報告書は、平成6年度に実施した史跡高遠城跡二ノ丸便所建設事業に伴う、埋蔵文化財緊急発掘調査報告書である。
2. この緊急発掘調査は、史跡高遠城跡内（長野県上伊那郡高遠町大字東高遠2286番地内）二ノ丸便所建設事業に伴い、史跡高遠城跡の現状変更（便所改修等）許可の条件である発掘調査を実施したもので、便所建設部分・汚水管理設部分の埋蔵文化財が消滅する箇所もあるため、記録保存をも図るものである。
3. この緊急発掘調査は、高遠町からの委託により高遠町教育委員会が実施した。
4. 本報告書は、短期間の内にまとめることが要求されているため、調査によって検出された遺構・遺物を、より多く図示・図版化することに重点をおき、資料の再検討は後日の機会に譲ることとした。
5. 本報告書の執筆者及び図版制作者は次のとおりである。
 - 本文執筆者 友野 良一・松島 信幸・寺平 宏・小松 博康
 - 図版製作者 友野 良一・小松 博康・丸山まゆみ・保科 時子
 - 写真撮影 友野 良一・加藤 俊幸・小松 博康
 - 遺物整理 友野 良一・小松 博康・丸山まゆみ・奥田 静子
6. 本報告書の編集は、主として高遠町教育委員会がおこなった。
7. 遺物及び実測図類は、高遠町教育委員会が保管している。
8. 本文中に使われている「JニIII」は、「城跡二ノ丸での3回目の発掘」の略号であり、遺物番号を示す。
9. 出土遺物一覧表内の陶磁器類については、時代考証などの点で、下記の諸団体及び諸氏にご指導・ご教示をいただいた。お忙しいところを時間を割いてくださったことについて、この場を借りてお礼申し上げます。（順不同）

瀬戸市教育委員会

瀬戸市埋蔵文化財センター 藤 沢 良 祐 先生

多治見市教育委員会

多治見市文化財保護センター 田 口 昭 二 先生

〃 梶 井 勝 先生

佐賀県

九州陶磁文化館 大 橋 康 二 先生

第 I 章 発掘調査の経緯

第 1 節 発掘調査に至るまでの経過

平成 6 年 7 月 26 日	県文化課より埋蔵文化財現地調査
平成 6 年 8 月 4 日	二ノ丸便所新築事業に伴う史跡高遠城跡の現状変更許可申請書を提出
平成 6 年 9 月 14 日	発掘担当者友野良一氏との打ち合わせ
平成 6 年 9 月 20 日	文化庁長官より発掘調査の条件を付して現状変更許可あり

第 2 節 調査会の組織

○高遠町教育委員会

教育委員長	北原 作英
委員長代理	横田 稚
委員	中畑 節子
”	阪下 哲彦

教 育 長	山川 廣
教 育 次 長	田中 幸人
社会教育係長	加藤 俊幸
係	小松 博康
”	丸山まゆみ

○発掘調査団

発掘担当者・調査団長

	友野 良一（日本考古学会会員・東洋陶磁学会会員）
調 査 員	本田 秀明（長野県考古学会会員・長野県文化財パトロール員）
”	松島 信幸（第四紀学会会員） 地形・地質
”	寺平 宏（第四紀学会会員） 地形・地質

第3節 発掘調査の経過

月・日 日 誌

9・30 発掘機材・資材の搬入とテントの設置をおこなう。

10・1 調査地クイ打ちとB、M₁を設定する。(H=803.33m)

10・3 (月) 曇り時々晴れ夜一時雨

午前10時発掘調査地にて挨拶をおこない、発掘担当者友野良一氏より調査方法の説明を受け、便所建設予定地より調査に入る。建設予定地について主に問題となる点は、二ノ丸土居の遺構が見つかるかどうかであるため、建築面積(70.1㎡・東西8m・南北5m)の外壁外側約80cmまでを調査対象範囲とする。このベルト部の南側を第1トレンチ、東側を第2トレンチ…(第10図)とし、第1トレンチから重機による表土剥ぎ、続いて掘り下げをおこなった。

第4トレンチまでを20cm程度掘り下げ第1～3トレンチに集石を発見。第2トレンチの2箇所の集石については東側へ拡大して全容を確認し、トレンチ内側へ調査箇所を移した。建築場所にあたるトレンチ内側は、これを東西・南北それぞれ中央に30cm幅のベルトを残して四等分し、1～4グリッドを設定した。本日第2グリッド掘り下げまでをおこない午後4時30分終了とする。(作業員13名)

10・4 (火) 曇り

午前9時作業開始。午前中建設予定地第1・2グリッド掘り下げ、午後第3・4グリッド掘り下げをおこなう。表土下10～15cmの所を中心に集石をいくつか確認し、集石Noを付け、平板と10cmメッシュにて測図する。地元作業員より、この場所には昭和30年代頃まで民家が建っていたとの情報得られ、その点についても調査を進めることとする。土台石は取り外されているが、現地表面くらいが根太の高さと思われる。第1トレンチ東側の集石については、南方向に続いているため幅約2m・南へ1.3mほど拡大して掘り下げ、これを第5グリッドとした。

第3グリッド集石No9より、アルマイトの鍋蓋と亜鉛鉄板製煙突が出土した。(作業員13名)

10・5 (水) 朝方雨後曇り

朝まで雨模様のため、様子を見て午前10時より作業を開始する。昨日に続き建設予定地の集石の測図作業を進める。午後からは現場の清掃をし、現時点(第1レベル)での上空からの写真撮影をおこなう。狭い範囲ながらタカトオコヒガンザクラの樹林の中であり、枝が邪魔して思うようにならず、各グリッド毎4分割での撮影となる。樹木の影も影響が大きい。本日第1・4グリッドを撮影する。(作業員11名)

果文化課に連絡を取り、今後の調査の進め方について協議のため、指導主事の派遣を要請する。

10・6 (木) 晴れ時々曇り

集石の実測作業と写真撮影、第2・3グリッド写真撮影。第4トレンチ外側南西に、身障者用便所予定地があり、この場所を第6グリッドと設定、また便所入り口にあたるピロティー部分を第7グリッドとし、掘り下げを同時におこなう。第1グリッド南向き断面手前を試掘し、底部までの深度を地表より約80cmと確認する。第5グリッドより昭和16年の一銭貨幣出土。(作業員13名)

10・7 (金) 晴れ

果文化課小指指導主事と調査現場にて打ち合わせをおこなう。現在建設予定地にて確認できる集石については、地層のかく乱状況や出土遺物から見て、昭和の中頃までこの場所に在ったと言われる民家のものであると思われるので、これを取り上げ、特に二ノ丸土居の遺構が、この建設地の南・東側に見られるかどうかの確認をすることで作業を進めることとした。集石の平面の実測、写真撮影、レベル測量をおこない、同時に集石の取外し、掘り下げをおこなう。(作業員13名)

10・11 (火) 曇り

昨日に引き続きグリッドに別れ、集石の平面の実測、写真撮影、レベル測量をおこない、同時に集石の取外し、掘り下げをおこなう。本日県文化財パトロール員の本田秀明先生も調査に参加してくれる。建設予定地第1グリッドより天目、灰釉の陶器片、内耳鍋の取っ手部が出土する。(作業員12名)

10・12 (水) 曇り午後一時雨

本日友野調査団長は、出土陶磁器片の鑑定と時代考証の打ち合わせのため瀬戸市埋蔵文化財センターへ出張する。昨日お願いした本田先生が調査の指揮に当たる。作業は引き続き、建設予定地第1・4グリッドと、2・3グリッドを交互に掘り下げ、平板・レベルにより遺物と集石下に出土する配石などの記録をおこなう。

高遠城跡を保存整備していく上で、作業に、より正確さを期するため、公園内の測量基準点設置について測量会社と打ち合わせをおこない、今回二ノ丸に2箇所と月蔵山中腹に1箇所の計3箇所に、基準点を置くこととする。

午後2時30分頃、雨に見舞われたためシート掛けをし、午後3時30分本日終了とする。建設予定地第1・4グリッドについては表土から0.7m～0.9m、テフラ層まで掘り下げを完了する。第4グリッドから第1グリッドにかけてわずかに傾斜していることが解る。また、ピットを数個確認できたが、遺物等による裏付けが稀薄だった。(作業員12名)

10・13 (木) 晴れ

第2グリッドから第5グリッドにかけての集石No.5・6・7について3段目の実測・取り上げ、並びに第2・3グリッド掘り下げをおこなう。第3グリッドについてはほぼ完了する。

友野調査団長より昨日の瀬戸市出張報告があり、第1グリッド出土の天目は、鉄・錆蝕で16世紀くらい、スリ鉢・灰釉皿については15世紀(大塚期)に比定できそうとのこと。(作業員9名)

10・14 (金) 晴れ

第2グリッドの最終掘り下げをおこない、合わせて第5グリッド集石No.5・6・7の4段目について実測と取り上げをする。第1・2グリッド東西ベルトの断面実測、並びに写真撮影をおこなう。各グリッドの掘り下げはほぼ終了するが、二ノ丸土居についての遺構と思われるものは確認できなかった。

本日午後から寺平調査員により、城跡周辺の地質調査がおこなわれる。建設予定地東側約1mの所に調査用ピットを掘り、土質標本を採取する。(作業員14名)

10・17 (月) 夜半よりの雨朝方上がり曇り時々晴れ

建設予定地中央東西のベルトをはずす作業にかかる。シートを敷きながら慎重におこなう。第1グリッド北側のベルトから、石と一緒に大量のビン・カン・陶器などのゴミが出土、また、中央付近に周囲の集石と同レベルの集石を確認する。午後より同じく、南北のベルトについて断面の実測・写真撮影をおこない、ベルトをはずし始める。

寺平調査員は、終日史跡内外の地質について東高遠周辺を広範囲に踏査。(作業員7名)

10・18 (火) 晴れ

昨日に続き建設予定地ベルトをはずしをおこなう。建設予定地内の最終面はピットの数が多く、底の堅いもの、柔らかいもの、大きさ、深さについても混在しており、根痕と思われるものも多い。テフラ面はかなり凸凹しながら東と南に傾いている。

午前10時頃より、管路第1トレンチの重機による表土剥ぎ、掘り下げをおこなう。管路の起点は建設予定地北側とした。起点より約20mについて実施するが、石が多く手間取りそうな予感。50m地点より

中国貨幣が出土し、表は『元豊通寶』と読める。

寺平調査員は、史跡内の土質標本採取。(作業員12名)

10・19 (水) 曇り

管路第1トレンチの掘り下げを前日に引き続いておこない、同時に集・配石の実測・写真撮影をおこなう。管路は幅1mで設定し、平板(1/40)とメッシュ(1/10)により平面を測図、断面は水系を基準に1/10で測図することとした。

18m地点より水道管が露出、以前この場所に店舗があったのでこれに引き込んだものと推定される。トレンチ中央付近はかく乱土層が深い様子なので、20m地点を試掘してテフラ層まで掘り下げてみるが、地表より1.6mとかなり深いことが確認できた。寺平調査員は昨日の継続調査。(作業員13名)

10・20 (木) 曇り

管路第1トレンチの起点より14~23mの間の下層が確認できないため、この間の掘り下げを重点的におこない、同時に集・配石の実測を進める。午後地表面より0.95m掘り下げた所から、縁の一箇所を除いてほぼ完全な状態の丸瓦が出土し、続いて表面より0.9m下層より鉄軸の丸瓦が縁1/3ほど欠けた状態で出土した。写真撮影・測図の後取り上げる。本日曇り空のため夕方ますます暗く、午後4時早じまいとする。(作業員11名)

10・21 (金) 雨昨夜から降ったり止んだり

昨夜後半から雨が降ったり止んだりの天候で、外での調査が困難なため、公園内の高遠閣にて昨日分までの遺物洗いをおこなう。遺物番号で611点になった。

昼近くには雨が上がり、陽がさすこともあったので、午後から2班に別れて遺物の洗浄と管路第1トレンチ昨日分続きの掘り下げをおこなうことにする。午後2時頃からはまた雨が振り出し、狭い場所なのでシートをかけて作業を進めるが、午後3時よよい雨が強くなり中止する。遺物洗いについては昨日取り上げ分まで終了する。(作業員10名)

10・24 (月) 晴れ

先週までで第1トレンチ掘り下げは終了とした。午前中第1トレンチ最終遺物を取り上げ測量、北側断面と最終面の清掃、写真撮影、平面実測。同時に便所建設予定地のベルト中央ローソクの撤去をおこなう。第1トレンチ起点から15~20mの間については、とりえず汚水管理設に当たって支障がないので、地表下1.2mの地盤をもって調査終了とし、埋め戻しをおこなう。

作業の進め方について打ち合わせをおこなう。今回建設を予定している便所は水洗式であるため、前回(1992年)に同じ二ノ丸内北西に、発掘調査の後建設した女性用便所の既存布設マンホールまで、総延長約167mの汚水排水管の布設をおこなわなければならない。この管路について建設予定地から城跡二ノ丸の中央通路までを管路第1トレンチ、通路を北に向かい高遠閣前までを管路第2トレンチ、高遠閣前から西に向きを変え既設マンホールまでを管路第3トレンチとしているが、現場ではまだまだ観光客の姿も多く、通路をふさぐ期間を最少限としたいので、第2トレンチ(約93m)を残して第3トレンチにまづかかるとした。第3トレンチは、高遠閣前消火栓から既存便所まで水道管が埋設されていると言うことから、すでに新しい時代にかく乱されていると思われる。この水道管の管路を調査ルートとし、午後から調査地ライン引き、重機による表土剥ぎ、掘り下げをおこない、レベルの移動、平行して便所建設予定地最終面の写真撮影をするが、天気がよくて桜の枝が邪魔をする。管路第1トレンチの平・断面の実測など、本日第3トレンチ15m程度を掘り下げる。(作業員11名)

10・25 (火) 晴れ

朝から管路第3トレンチ掘り下げの続きをおこなう。28~34m付近のかく乱層が切れないために掘り下げに手間どる。電話線埋設管路のクイ入れをN T T職員がおこなう。本日松島・寺平両調査員により、城跡周辺の地層・地質確認調査を実施。(作業員10名)

10・26 (水) 薄曇り

写真撮影には好都合な天気であるので、便所建設予定地最終面の写真撮影を再度おこなう。シートを取りあらためて清掃する。写真撮影の後便所建設予定地と、管路第1トレンチの最終平面・レベル測量をおこなう。発掘作業は昨日と同様に第3トレンチの掘り下げ、集石の実測と遺物取り上げ、第2トレンチの発掘調査予定トレンチのライン引きをおこなう。松島・寺平調査員による地質調査も、昨日に引き続き実施される。(作業員9名)

10・27 (木) 夜半よりの雨朝方上がり曇り時々晴れ

第3トレンチを昨日に続き掘り下げ、午前10時頃にはほぼ終了し、平・断面の写真撮影と実測を始める。公園管理の桜守りと打ち合わせをし、第2トレンチへかかる。まず、N T Tの管路と水道管の位置を確認するため、第2トレンチ起点より60m地点(C)、30m地点(B)、10m地点(A)の3箇所を、東西にかけて重機バケット幅で表土剥ぎの後試掘する。この第2トレンチは、長年に渡り公園内通路であったため踏み固められ非常に堅く、ジョレンも歯がたたない。60m地点の試掘トレンチは、N T T管の東側に約1.5m・深さ1.7m程かく乱されている箇所があり、割と大きな平石の配石が3個そのまま出土した。水道のパイプがここから西へ向かっていることが確認できた。また、30m地点では、N T T管の西側60cm・東側については3.3m以上で確認できないが、深さ2.6m以上かく乱されている土層が現れ、60m地点と同じ様に大きな平石の配石が3ヶ確認できた。また、この層は東に傾斜している事も解った。水道管については、5mの長さで調査したにもかかわらず確認できなかった。10m地点においては、地表より約45~50cmの深さでテフラの層が現れたが、水道管の位置は特定できなかった。いずれにしろ、30m、60m地点は、かなり深い範囲でかく乱されており、このことから水道管をこれ以上探さずに、すでにかく乱されていると思われる。N T T管路の東側に添って第2トレンチを設定することにした。試掘トレンチの断面の実測をおこなう。便所建設予定地の最終平面・レベル測量は、本日終了する。

(作業員14名)

10・28 (金) 曇り

管路第2トレンチは、南側を起点として第1トレンチの続きから表土剥ぎをおこない、掘り下げを開始するが、第1トレンチ西側の32m地点から高遠焼きと思われる土管が出土する。南北の方向を向いているが、長さ90cm程で両端が破損していつながりがあるかどうかは不明である。ちょうどつなぎの部分が残っており、 $\phi 15\text{cm}$ で片方が膨らみ、もう一方をはめこんである。継ぎ手には水漏れしないように粘土を押し付けてあった。昨日に続き試掘トレンチの平・断面の実測をおこない、30m地点は深くて危険であるので埋め戻す。又、第1トレンチの70cm以上の深さの部分についても埋め戻しをおこなう。トレンチ中央を横断している水道管 $\phi 13\text{mm}$ の露出している部分の管が、土砂の重みで破損し一時潰れた。本日で管路第3トレンチの最終平面・レベル測量は終了。第2トレンチ本日分の掘り下げは10m程度であった。また、測量会社による二ノ丸基準点の設置工事をおこない、掘削の際立ち会う。掘削幅1m \times 1m、深度60cmで本日に2点おこない終了する。(作業員12名)

10・31 (月) 曇り

前日に続き管路第2トレンチの掘り下げをおこなう。第2トレンチ断面の起点は、第1トレンチ北側

断面の35m地点に当たる。地表面から無為層（テフラ）までの深さは、12mの地点まで35cmから平均で50cm位で、かく乱されている箇所でも一番深いのが、N T Tの電話線の埋設されている2m地点の、約80cmであるのに対して、12mを過ぎてからだんだん深度を増し、14m地点では2mを越えてしまい、安全面と土層の堅さから調査が困難であるので、2m止まりとし底部の確認はおこなわなかった。このかく乱層も、15mの地点から北へ向かってテフラ・川砂・山砂などが割合規則正しく層になっており、20m地点までは下降、それ以降30m地点までは逆に上昇している。また、このトレンチの試掘の際に30m地点の地層が東へ傾斜していたのと同様に、それぞれの東西の断面も西から東へ傾斜し、12m地点の落ち込みは北西の向きに傾斜していていることが確認できた。

午後は、昨日管路第1トレンチから出土した土管の件で、高遠町郷土館に保管してある文化11年(1814年)の銘の入った土管を調査したが、この土管は素焼きであり、表面に布目痕が残り、つなぎの部分は特に膨らんでほめ込み式になっていないので、これとは異質の物と考えられる。本日の第2トレンチ掘り下げは、30m地点まで。(作業員11名)

11・1 (火) 晴れ

管路第2トレンチの続きを掘り下げる。かく乱層の深い部分はまだ続き、60m地点からようやくテフラ層が表土より70cmの所に顔を出す。45m地点を掘り下げてみたが、この辺の層は平坦である。1.2m程掘り下げた所から磁器染付けの近年の遺物が出土する。地層の写真撮影を試みるが、狭い場所で開催を極め、平・断面の写真撮影にも、いよいよ落ち葉の最盛期となり、憎らしいほどの量の枯れ葉が舞い落ちる。遺物の取り上げと一緒にトレンチの実測を始める。本日70m地点まで掘り下げるが、堅い土層に手を焼くばかりで遺物はほとんど出土しない。重機により第3トレンチ深さ70cmまで埋めもどし作業。(作業員14名)

11・2 (水) 晴れ

管路第2トレンチから、第3トレンチつなぎ部分の掘り下げと、同時に第2トレンチ平・断面の写真撮影、並びに実測とレベル測量をおこなう。本日掘り下げる場所は、高遠閣前の公園北側の入り口に当たり、特に歩行者が多く短期間で埋め戻したい。作業員の内2人は、先日洗浄した遺物の番号書きをおこなう。

発掘調査終了後の、工事着工までの現場管理について、設計事務所・担当課と打ち合わせをおこなう。管路については危険防止のためなるべく埋めもどしたいが、第2・第3トレンチについては歩行者等に影響が少ないので、地表から約70cmまでの所はそのままとし、それ以上の深い箇所について埋め戻しをおこない、第2トレンチは、公園内の動脈であるため、至急埋め戻したい。また、建設予定地については安全のためのロープを張り、そのままの状態とする。11月17日に建設工事の入札をしたいとのこと。実測について本日中終了せず、明日3日が「文化の日」で休日となってしまうが、教育委員会職員により実測作業を間に合わせることにする。(作業員11名)

測量のための3点目の基準点を、月蔵山中腹に入れる作業を測量会社によりおこなう。

11・3 (木) 朝まで雨後曇り

昨夜からの雨のため作業は午後からとなってしまった。前日できなかった平面・断面の実測作業をおこなう。(作業員3名)

11・4 (金) 晴れ時々曇り

県教委市村指導主事に調査の概略について電話で報告し、今後の指導を仰ぐ。建設予定地のビットについて、結論が出ないようなら現場を保護できるかとの話もあり、現場での打ち合わせについて要望す

る。また、担当課にて設計事務所との協議をお願いする。

10月21日以降の遺物洗いと遺物の番号記入のため、3人が高遠閣にて別班で作業。

管路第2トレンチ最終面の平面・レベル測量を北側から再度おこない、終了した時点で北側から埋めもどし作業を重機でおこなう。電話ケーブルと水道管については、埋設場所が確認できるようにクイ入れをおこなう。本日第2トレンチ測量、測図については終了するが、埋め戻しについては40m地点までで、残りは明日とし作業員を2人お願いする。

本日をもって調査のための現場作業のほぼ全部を終了する。(作業員12名)

11・5 (土) 曇り

午前9時より、昨日の残りである管路第2トレンチの約50mについて埋め戻しをおこなう。午前中で作業を完了する。(作業員2名)

11・11 (金) 晴れ

現場にて県教委小平指導主事と概報の作成や現場の処理について打ち合わせ。特に第1トレンチ西終末の配石は、石垣根部の遺構と思われるので、汚水管理設時に保存できるよう処置することとした。

11・28 (月)

県庁にて市村指導主事、丸山係長と文化庁への発掘調査報告について打ち合わせ。

12・12 (月) 晴れ

便所建設についての内話が取れたので便所建設予定地南東の中段を残している部分と、北側の集石について補足調査をおこなう。遺物取り上げ27点ともに新たな遺構は見できなかった。(作業員4名)

1～3月

工事に伴う補足調査と遺構保護のため立会い作業

遺物の整理と報告書の作成

《発掘調査に参加された方々(順不同・敬称略)》

名和 長利	名和 正一	藤沢 国夫	伊東 晃	赤羽 清	宮下英咲男	西村 守雄
奥田 静子	山谷 高江	池上ますみ	植木 勇	吉越 吉宗	井口 和徳	橋爪 茂登
北原 利夫	小松 善史	伊東 茂	西村 真紀	伊藤 透	山川 廣	田中 幸人
赤羽 潔	加藤 俊幸	小松 博康	丸山まゆみ	原 健二郎	矢沢 實	高嶋 好文

栃東部建設 佛峰コンサル

第II章 史跡 高遠城跡の環境

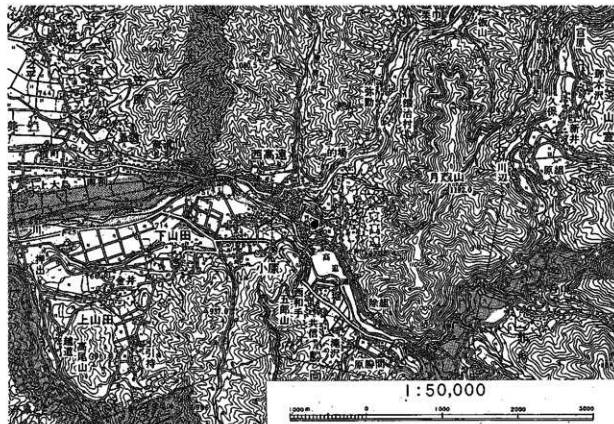
第1節 高遠城跡の位置と周辺の遺跡分布

今回の発掘調査地である長野県上伊那郡高遠町大字東高遠2286番地に所在する史跡高遠城跡の地理的位置は、東経138度3分55秒、北緯35度49分に位置している。この高遠城跡には、JR飯田線伊那市駅から国道361号線により東方へ9kmの地点にあたる。また、中央東線茅野駅から杖突街道（国道152号線）にて高遠へ至ることもできる。

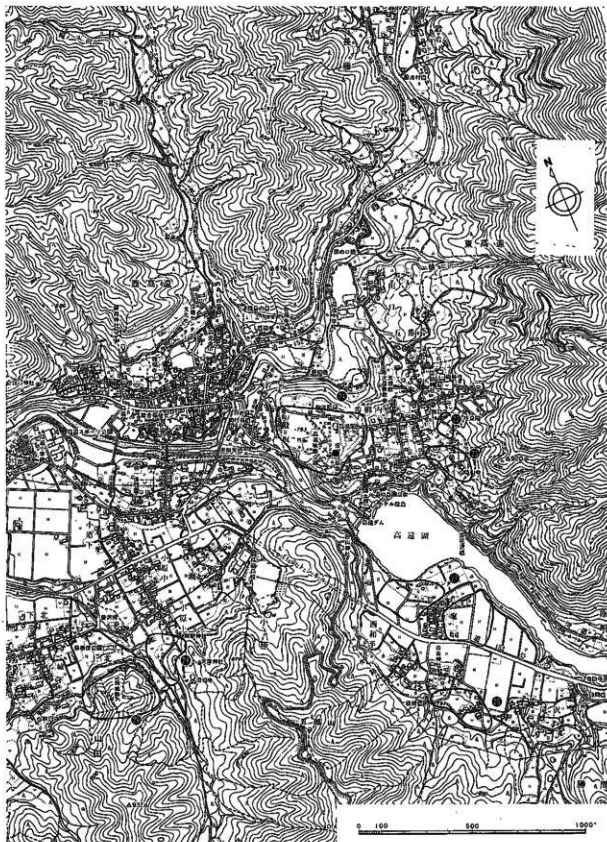
高遠は天竜川の大支流である三峰川が、赤石山脈から伊那盆地へ流れ出している谷口部に位置している。赤石山脈の西麓には中央構造線が南北方向にとおり、三峰川は赤石山脈北部の峰々から流れ下ってくるあまたの支流を中央構造線沿いの谷に集めている。一本の奔流となった三峰川は、伊那山脈の月蔵山と三界山の間を貫いて高遠城跡に出てくる。一方、中央構造線の北端にあたる杖突時に発する藤沢川は、中央構造線に沿いながら南下して高遠に達し、三峰川に合流している。高遠城跡は、三峰川と藤沢川とが深い峡谷を穿って合流する部分に位置している。城跡は月蔵山の西麓直下であり、三方を峡谷に臨む高台の上に構えており、標高は805m内外の範囲にある。

城跡からは三峰川の谷奥に仙丈ヶ岳を仰ぎ見、また、西に向かって広々と開ける伊那盆地の背後には、駒ヶ岳連山が望見される。天険の要害であると同時に絶景の地の利を得ている。そして、高遠の位置は交通の要所でもある。中央構造線は中央高地と太平洋とを一直線で結ぶ古道として古くから用いられている。これを南北の道とすると三峰川によって東西の道が開けており、高遠は地形的にも交通の要の位置にあたる。（第1図）

高遠城跡のある月蔵山西側山麓の一带には、城跡も含めて桂泉寺・花畑といった縄文時代の埋蔵文化財も多く、近世に至るまで広い範囲の重要な歴史の鍵をにぎっている一帯である。（第2図）



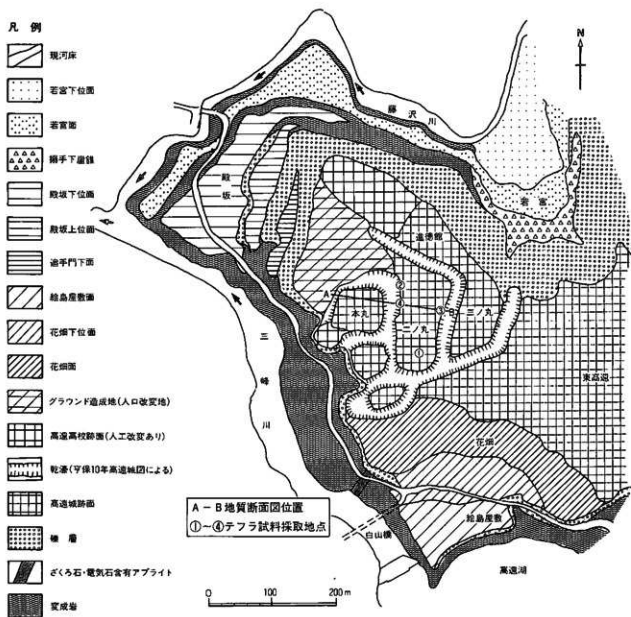
第1図 高遠城跡の位置図



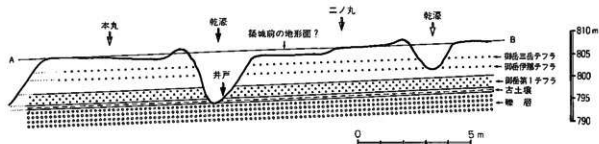
- 遺跡名 ● 桂泉寺 ● 花畑 ● 高遠城跡
 ● 西勝間 ● 堀 ● 後沢 ● 古城

第2図 高遠城跡の地形及び周辺の遺跡分布図

第2節 高遠城跡の地形及び地質



第3図 高遠城跡の地形・地質図



第4図 高遠城跡の地質断面図(第3図中A-B)

1) 高遠城跡の地形

城跡のある台地は、三峰川が形成した扇状地の扇頂部にあたり、扇状地形形成後は侵食を受けて台地となった。したがって、三峰川と藤沢川に面する侵食崖は急峻であるものの、台地はきわめて平坦な地形を保持している。とくに、城跡の部分は北西に向かって半島状に突き出ている、周辺をとりまいている山と谷の中で、ひときわ平坦な地形になっている。

平坦な地形をつくっているのは、かつての扇状地の表層に堆積したテフラ層に起因する。テフラについての観察結果は次項で述べるが、第4図に示した城跡内の断面図から、テフラの堆積によって平坦地形が形成されていることが確認できる。

三峰川扇状地は高遠を扇頂としており、高遠から天竜川に至る扇尖部の長さが10km、また、天竜川に面して連続している扇端部の延長距離は12kmで、扇状地の面積は25.5km²におよぶ伊那谷では最大規模の扇状地である。

高遠城跡においては、扇状地をつくっている礫層の上に御岳第1テフラが被覆する。第1テフラの下位には粘土質の古土壌が堆積している。これらの地層は10～13万年くらい前の地層であることから、扇状地はそれより前に完成している。三峰川扇状地は中期更新世(70万年前から13万年前までの間)を通じて形成してきた扇状地である。13万年前頃から以降は三峰川の侵食作用が活発となり、扇状地は開析されはじめて現在の地形形成が始まっている。高遠城跡の地形面区分を中心とした地形・地質図が第3図である。

2) 高遠城跡のテフラ

(1) 概要

高遠城跡の地表は、厚さ9mのテフラ層で覆われている(第4図・第7図)。城跡全体の平面図は第3図である。城跡には空堀があり、その壁面でテフラ層の断面が観察できる。A-B断面が第4図で、本丸(A)から二ノ丸を経て三ノ丸(B)に至るほぼ東西の地質断面図である。

(2) ①地点での観察結果(二ノ丸の南側トレンチ)

二ノ丸の南側で、地表から3m下までの連続断面が、トレンチ調査によって観察できた。テフラは3mより更に下へ連続している。観察結果を第5図と第1表に示す。

地表から20cm下までの黒色土と褐色土まじりのなかからは、広域テフラの鬼界アカホヤテフラ(以下K-A hと記す)が検出された。20cm付近の黒～褐色土はK-A hの降下年代である6300年前の堆石土にあたる。

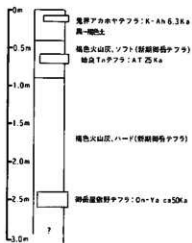
地表から1m下まで、広域テフラの蛤良Tnテフラ(以下ATと記す)が検出された。中でも、深さ60～80cmの部分に含まれるATの火山ガラス成分比が大きいため(第6図)、60cm付近の地層の堆積年代がAT降下年代の2万5千年前の地層にあたる。AT火山ガラスを含む地層はソフトロームと呼ばれる褐色火山灰層である。含まれている鉱物(しそ輝石・磁鉄鉱・普通輝石)は新期御嶽テフラ起源のものである。しかし、新期御嶽火山活動は、AT降下年代の直前で活発な噴火活動を終えていることから、地表から80cm下までのソフトローム質のテフラは、二次的に集積した風成層であると考えている。

80cmより下位は、ハードロームと呼ばれる褐色火山灰になる。深さ80cm付近の地層は、新期御嶽火山活動の終息期にあたる約3万年前ころの堆積物である。深さ2.5m以下に橙色～赤褐色のスコリア密集体がある。このスコリアはしそ輝石・普通輝石・磁鉄鉱に加えて黒曜石が検出されることから、御岳墨敷野テフラである。このテフラの降下年代は約5万年前である。

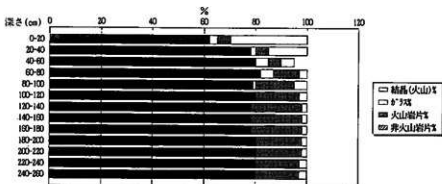
(3) ②地点の観察結果

(二ノ丸西側の空堀北部分)

二ノ丸と本丸との間の空堀、二ノ丸側斜面上部から御岳三岳テフラが検出された(第2表)。地表から3~4mの深さの部分で、三岳テフラ特有の赤褐色のスコリアである。スコリアの粒径は、0.5~2cmである。このテフラ層は、①地点のトレンチ底部で観察された御岳屋敷野テフラより1.5m下位にある。御岳三岳テフラの直下までが新时期御岳テフラの上層部にあたる。



第5図 高遠城跡①地点 テフラ柱状図



第6図 高遠城跡①地点テフラの砂粒成分比グラフ

第1表 高遠城跡①地点テフラ分析結果

採集場所	野外での特徴	結晶(火山灰)%	ガラス%	火山灰片%	非火山灰片%	主な鉱物	gの形質	特徴・その他	ノモ
0~20cm	灰色、棕色土が混じる	62	3	5	30	ky>mq>f(Dqt)as>bi	bw	褐色ガラスが見える	御岳火山灰>風化岩片>AT-K-Ak
20~40	黒褐色	78	2	5	15	ky>mq>as>f(Dqt)bi	bw		御岳火山灰>風化岩片>AT
40~60	褐色・軟質	80	5	5	5	ky>mq>f(D)as>qt	bw		御岳火山灰>風化岩片>AT
60~80	褐色・軟質	82	5	10	3	ky>mq>as>f(D)qt (sl)	bw		御岳火山灰>風化岩片>AT
80~100	褐色・硬質	79	1	15	5	ky>mq>f(D)as>qt>ho	bw		御岳火山灰>風化岩片>AT
100~120	褐色・硬質	80	0	17	3	ky>mq>as>f(D)qt>ho>sl			御岳火山灰を主とする
120~140	褐色・硬質	78	0	20	2	ky>mq>as>f(D)qt>ho>sl		灰-黒コーナス状岩片を含む	御岳火山灰を主とする
140~160	褐色・硬質	78	0	20	2	ky>mq>as>f(D)qt>ho>sl		灰-黒コーナス状岩片多い	御岳火山灰を主とする
160~180	褐色・硬質	78	0	20	2	ky>mq>as>f(D)qt>sl		灰-黒コーナス状岩片を含む	御岳火山灰を主とする
180~200	褐色・硬質	80	0	18	2	ky>mq>as>f(D)qt>sl		灰-黒コーナス状岩片を含む	御岳火山灰を主とする
200~220	褐色・硬質	80	0	18	2	ky>mq>as>f (hs)		灰-黒コーナス状岩片を含む	御岳火山灰を主とする
220~240	褐色	80	0	17	3	ky>mq>as>f(D)qt		灰-黒コーナス状岩片を含む	御岳火山灰を主とする
240~260	褐色-赤褐色スコリア帯層・非常に硬質	80	0	17	3	ky>mq>as>f(D) (hs-oh)		黒曜石あり	御岳御屋敷野テフラ On-Ya

第2表 高遠城跡 ②~④地点テフラ分析結果

採集場所	野外での特徴	結晶(火山灰)%	ガラス%	火山灰片%	非火山灰片%	主な鉱物	gの形質	特徴・その他	ノモ
二ノ丸西の堀北の方 ②地点	赤褐色スコリア	90	0	8	2	ky>mq>f(D)as>ho		結晶大	御岳三岳テフラ(On-Mk)
二ノ丸西の堀 ③地点	赤褐色スコリア	90	0	10	0	f(D)ky>mq>as>ho			御岳三岳テフラ(On-Mk)
二ノ丸東の堀 ④地点	褐色砂石	95	0	5	0	f(D)ky>mq			御岳伊勢テフラ(On-Is)
二ノ丸東の堀 ⑤地点	褐色砂石	10	75	10	5	f(D)bi>mq>ho	pm		御岳野1テフラ(On-PmI)
二ノ丸西の堀東の池 ⑥地点	褐色砂石(796mから約1.3mまで)	96	30	20	0	f(D)qt>bi>mq>ho	pm		御岳野1テフラ(On-PmII)
二ノ丸西の堀東の池 ⑦地点	灰褐色粘土(796mから下約1m)	10	0	10	80	qt>f(D)bi>mq		qtは非火山性	風化岩片主

凡例 鉱物名 ky: 石英 mg: 磁鉄鉱 mo: 白雲母 sl: ジルコシ 火山ガラスの形態
 as: 普通輝石 ol: かんらん石 fl: 流石 ob: 愚輝石 bw: パブル型
 ho: 角閃石 bi: 角閃石 qt: 石英 pm: 板石型

(4) ③地点の観察結果 (二ノ丸東側の空堀)

二ノ丸東側の空堀斜面において、スコリアと軽石の位置が確認できた(第2表)。確認には検土杖を用いた。地表から3.8m下に厚さ20cmの御岳三岳テフラがあり、地表から5.2m下に厚さ50cmの御岳伊那テフラがある。橙色の軽石粒からなり、粒径は0.2cm~0.5cmである。地表下5.8mに広域テフラの鬼界葛原テフラ(K-Tzと記す)がある。地表下6.5mに厚さ15cmの御 藪原テフラがあり、同じく6.8mに厚さ2.4mの御岳第1テフラが確認できた。

(5) ④地点の観察結果 (二ノ丸西側の空堀中央部分)

二ノ丸西側の空堀最下部において、御岳第1テフラと古土壌が確認できた(第2表)。地表から6.8m下の位置に、厚さ2.2mの御岳第1テフラが確かめられた。第1テフラは黄白色の軽石からなり、粒径は1~5cmである。第1テフラの直下、地表から9m下の位置に、厚さ1mの粘土質古土壌が存在する。地表下10mより下は礫層となる。

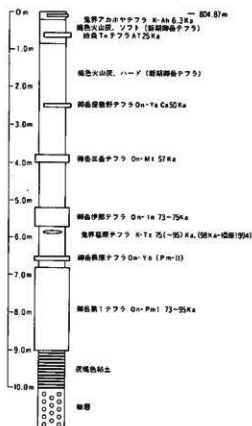
(6) 高遠城跡の地形面を被覆するテフラについて

高遠城跡地形面上を被覆するテフラは、①~④地点での観察結果より、第7図のような総合柱状図が得られる。これにより、高遠城跡の扇状地面を形成した礫層の上位には、扇状地の離水後、全層厚10mの風層風成の堆積物が認められる。最下位に厚さ1mの風成の粘土層があり、古土壌化によって灰褐色を呈している。その上位に層厚9mの新期御岳テフラ層からなるテフラが堆積している。

本丸から三ノ丸に至る古土壌とテフラの地質断面は第4図のとおりである。断面図のように、テフラ層は西に向かって1度傾斜している。この傾斜は地表面の傾斜と一致している。

高遠城跡の場内には何ヶ所かに井戸が掘られている。二ノ丸と本丸との間を分ける空堀には二ヶ所に井戸が残っており、現在も湧水がある。桜雲橋下の横井戸は一部分崩れているが原形が残っている。ここでは、古土壌が粘土層であるため不透水層となり、その上位に重なっている第1テフラ層が多孔質のため滞水層になっている。古土壌の上面から水が湧出している。空堀中にある他の井戸も同じ層準のところからの湧水であると推定される。したがって本丸の縦井戸も、深さ9mまで掘り下げて、古土壌の上面の湧水を汲み上げていたものと考えられる。

高遠城跡と内じ厚さで、古土壌および第1テフラよりK-Ahテフラまでを被覆させている扇状地面は、美簗の六道原である。三峰川が最初に巨大扇状地として六道原を形成しており、そのときの扇状地面は手良地区・美簗地区・富県地区の全域に広がっていて、この扇状地の扇頂部が高遠城跡を中心とする東高遠地区であったことを示している。



第7図 高遠城跡テフラ総合柱状図

3) 高遠城跡の地質

(1) 概要

高遠城跡をつくっている地質は下位より、基盤岩・扇状地礫層・テフラである。前項でテフラの説明をしたので、ここでは基盤岩と礫層について説明する。(図版)

(2) 基盤岩

高遠城跡の南西側はぐるりと三峰川によってとりかまれている。三峰川の河床は標高が730mで、本丸直下の、標高780m~790m付近まで基盤岩の露出する急崖をなしている。比高にして50m~60mの間で基盤岩が観察できる。

基盤岩は頤家変成岩類に属する黒雲母片麻岩である。片麻岩は白山橋の付近で観察しやすい。外見としては黒雲母の密集する暗色部が多く、石英・長石類が白色の綫状組織となって片理面と平行するように細かく互層している。源岩は砂岩泥岩類である。この付近の変成岩類に関しては数多くの研究報告がある。それによると、変成鉱物として、珪線石ができていて、紅柱石も含まれている。肉眼的にはざくろ石の大きな結晶が見える。

白山橋より西に50mの地点に、ざくろ石電気石含有アブライト脈がある。幅13m、岩脈の走行はN33°Eである。

(3) 礫層

高遠城跡は、硬い変成岩の岩盤が土台となり、その上に厚さ10mほどの礫層が被覆している。礫層は本丸南西の笹郭の崖上で観察された。ここでは礫層の厚さ8m、礫は三峰川が運搬した砂岩・緑色岩・チャートなどで、平均礫径5~10cm、最大礫の径は30cmである。

南郭の崖上では、標高785m地点に基盤岩と礫層の不整合面があり、礫層の上限は標高795mである。礫層の厚さは10mである。白山橋のたもとでは道路に面して基盤岩とこれを不整合に覆う礫層とが50m以上続いて観察できる。礫種は砂岩・粘板岩・チャート・緑色岩・花崗岩などで、平均礫径は10~20cm、最大礫の径は40cmである。礫のインプリケーションにより古流向は東→西(270°)を示し、礫層堆積当時の三峰川の流向を示すものである。

高遠城跡の北東側に面する藤沢川の侵食崖においては表層を表土に覆われていて、露頭の観察ができない。調査した限りでは礫の転石が主で、基盤岩の露出は確認できなかった。推定では斜面の大部分は礫層からなり、その厚さは40mに達する。礫種は内帯側の砂質ホルンフェルス・三波帯川起源のチャート・緑色岩で、藤沢川の運搬による礫層である。礫径は数cm以下の中礫からさらに細かな小礫からなる。最大礫は径25cmである。

東高遠配水池・諏訪神社横から流れ下って、高遠中学校の南側で藤沢川に合流する小沢沿いには、礫層と共に、砂層や粘土層がくりかえし互層している。これらの地層は藤沢川によって堆積したもので、三峰川から運び出された外帯上流の礫種は入っていない。また、粘土・粘土質砂層などの細粒堆積物が介在することから、三峰川の扇状地形形成に伴って、藤沢川の合流部付近では、時々停滞性の環境が出現したと考えられる。

第3節 歴史的環境

高遠には平安時代の末頃から、この付近を支配する領主の居城があったと言われている。また、周辺の伊那市美すず笠原の蟻塚城や、高遠長藤の城山なども中世の城跡と考えられているが、その城主など判然としていない部分が多い。

江戸時代に古銭を発掘した東高遠浅間矢場にも、豪族の居館があったと伝えられているし、同じく殿坂に根小屋の地名が残っているので、この辺に領主の居館があり段丘の上に砦があったのではないかとする説もある。南北朝の時代から、高遠氏が7代にわたって高遠の領主であったが、その居城もはっきりしていない。

高遠城を現在の位置に築城した確実の史料と言われているのは、武田信玄側近の臣、高白齋が記した『高白齋記』である。これには天文16年(1547年)3月のところに『高遠山の城嶽立』とある。これは信玄が全くの処女地に築城したのか、あるいは信玄に滅ぼされた高遠氏の居城地を拡張改修したのか明らかではないが、当時築城技術に優れていた山本勘助の縄張りによって行なわれたと伝えられ、本丸西側の一面には「防助郭」の名が今も残っている。これらのことから高遠城は信玄が築城したと考えられている。

築城以来武田氏(35年間)、保科氏(53年間)、鳥居氏(53年間)、幕府領(2年間)、内藤氏(182年間)と、約350年にわたり南信濃地方の中心として繁栄した城である。

高遠城の歴史を見ると、信玄が築城をはじめたわずか35年後の天正10年2月下旬には、織田信忠の5万の大軍は伊那谷を北上し、武田の諸城を落として進軍し、高遠城を囲んだ。時の城主弱冠20歳の仁科五郎盛信(信玄の五男)は、3,000の兵とともに断固として孤城にたてこもって奮戦したが、3月2日多くの城兵とともに花と散った。その壮絶な戦いの様はまさに特筆すべき戦国悲史として、この地に生々しく語り伝えられている。

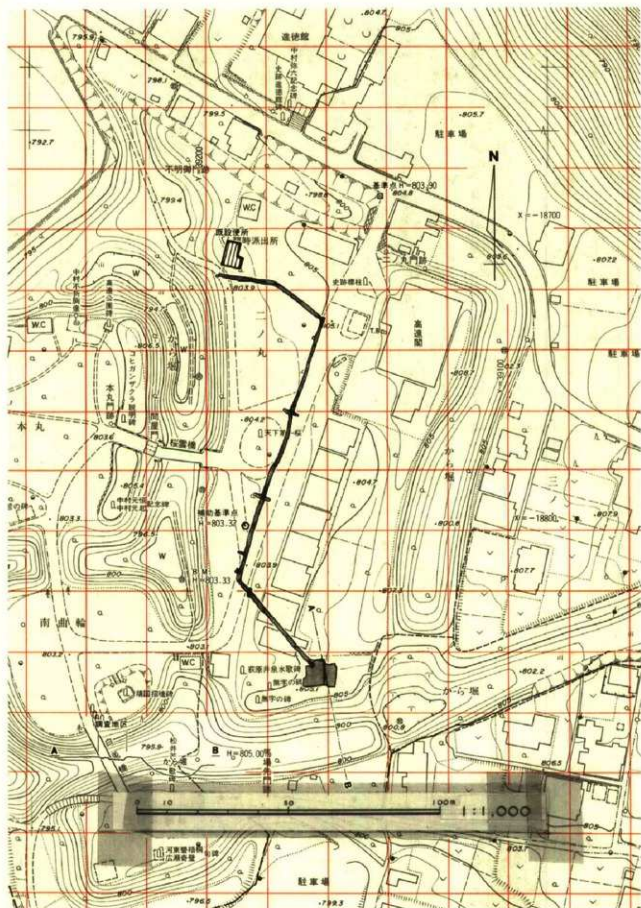
城郭の変遷からみると、あくまでも絵図の上からの想像でしかないのだが、保科氏以前の郭の中には笹郭が無く、本丸と二ノ丸の間は土橋でつながっていて、南郭と二ノ丸の間の空堀も両郭の中央付近にあり、方向も東西に向かって造られていたようである(第26、27図)。

時代は変わり、鳥居氏の頃と思われるが、大手の位置を東から西の現在地に移したことや、内藤氏の頃地震のため城内の破損を修復したことなどがあげられる。

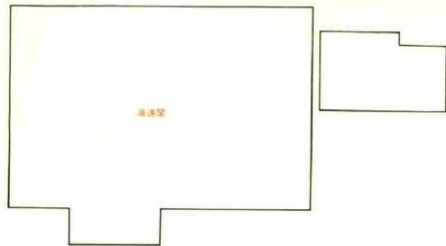
その後廃藩となり明治5年城は解体され、城内の建造物、樹木、城地の一部が払い下げられ、明治8年には有志がここを借り受けて公園とした。城郭址は当時の縄張りの様相をとどめており、昭和48年5月26日国の史跡としての指定を受け、その指定理由として「三峰川と藤沢川の合流点にある段丘先端部に築かれた平山城で、きわめて戦国的な城郭の構えをとどめている。」とある。また、三ノ丸地籍には、同時に史跡に指定された「進徳館」が、昭和56年に解体復元され現存している。

史跡内には、明治のはじめ頃から、元高遠藩の馬場であった「桜の馬場」から、移植されたりして植え始められたコヒガンザクラがあり、今の老木はその時に植えられたもので、4月には1,500本余りの桜が、愛らしいピンクの花を開き、人々の目を楽しませている。昭和35年にはこのコヒガンザクラ樹林が、長野県の天然記念物に指定されており、現在観桜期間中に訪れる観光客は約30万人に達し、入場者のピークは1日3万人を超える。さらに年間では65万人を数え、交通網の整備などが手伝って、年々県外からの観光客の増加が目立っている。

第三章 調査結果と遺構の保護

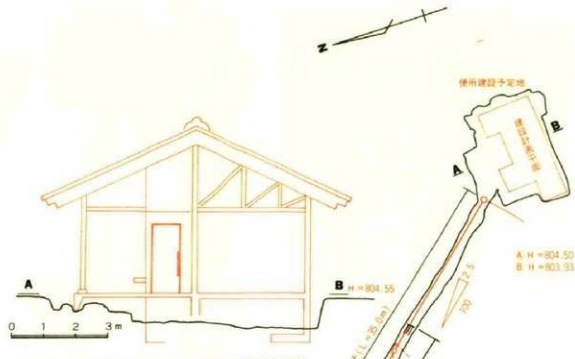


第8図 発掘調査箇所位置図

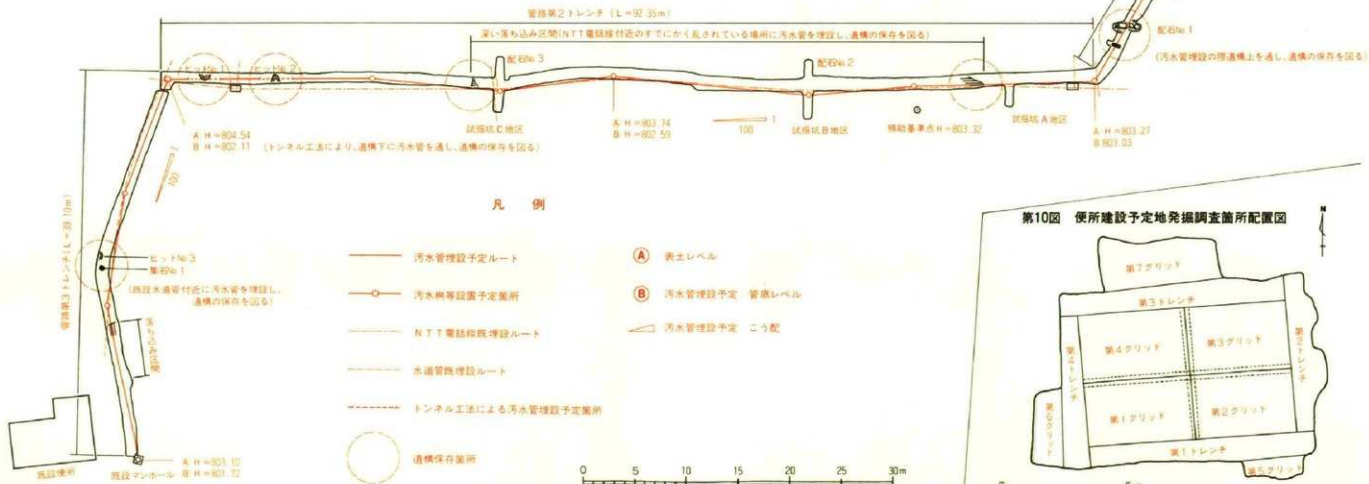


第3表 発掘調査箇所遺構等集計表 (箇所)

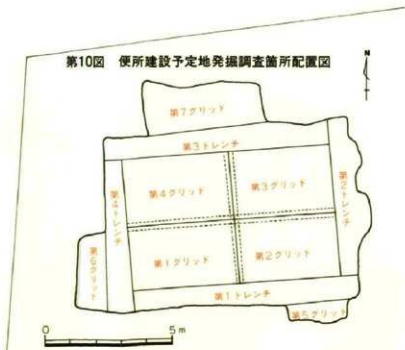
調査箇所	発掘調査箇所	遺構の種類	発掘面積 (㎡)	調査日	調査者
第1区画	配水	配水	21	21	
		パイプ	24 (BWD) 11	27	
第2区画	配水	配水	1	1	
		パイプ	8	8	
第3区画	配水	配水	3	3	
		パイプ	3	3	
第4区画	配水	配水	2	2	
		パイプ	2	2	
第5区画	配水	配水	1	1	
		パイプ	3	3	
第6区画	配水	配水	3	3	
		パイプ	3	3	
第7区画	配水	配水	1	1	
		パイプ	3	3	
第8区画	配水	配水	3	3	
		パイプ	3	3	
計	配水	配水	1	1	
		パイプ	3	3	
計	配水	配水	5	5	
		パイプ	3	3	
計	配水	配水	1	1	
		パイプ	3	3	
計	配水	配水	3	3	
		パイプ	3	3	



第11図 発掘調査断面並びに便所建設計画立面図

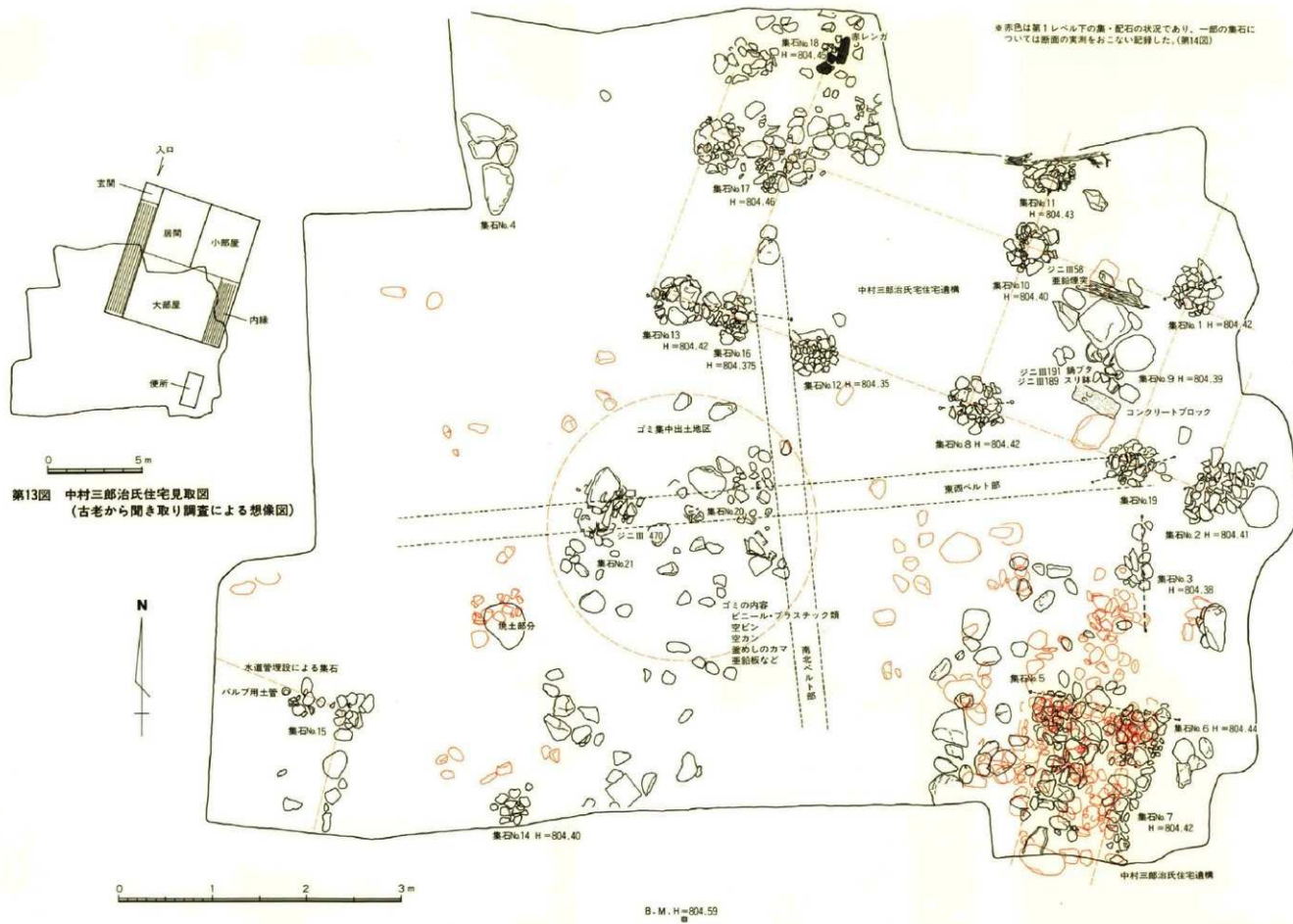


第9図 発掘調査状況見取図並びに工事実施に伴う遺構保存計画図



第10図 便所建設予定地発掘調査箇所配置図





第12図 便所建設予定地平面実測図 (第1レベル並びに第2レベル以降)



第1節 調査の概要

今回の緊急発掘調査は、史跡高遠城跡内の二ノ丸地籍（高遠町大字東高遠2286番地）に、公衆便所の建設が予定されているため、この建設工事についての現状変更許可の条件として行われた調査である。

調査範囲は、便所建設予定地約85㎡と、水洗式の便所であるため汚水管理設置予定地180㎡の合計265㎡を対象とした。（第9図 発掘調査状況見取図並びに工事実施に伴う遺構保存計画図）。

調査は、平成6年10月3日から11月4日までの実質24日間を費やして実施された。調査の進行状況並びに調査方法などについては、第1章の中で詳しく報告しているので参照されたい。

発掘調査終了以降概要報告を行なう中で、県教育委員会並びに文化庁と、工事に際しての遺構の保護等についての協議を行ない、1月の工事の起工から工事立会いと、協議の中で指摘されている取り残し箇所への補足調査、ならびに遺構の保存作業を行なってきた。

建設予定地については、二ノ丸東南の空堀に6mと近い位置にあり、現在土居は撤去されてはいるものの、今回の調査によりこの土居の遺構が発見されるかどうか、将来の復元の際に支障にならない位置を設定する必要がある。また、管路部分にあたっては、広大な二ノ丸を南北の方向に、狭いながらも調査ができると言うことから、今まで古文書・絵図などからしか調査がなされておらず、学術的な発掘調査もされていない高遠城について、何らかの情報が得られるのではないかと期待も大きかった。特に第1トレンチでは絵図面によると、西洋稲古場・御用米土蔵などといった建物が、場所の特定はできないものの、存在していたと思われるので、これらの建物の手掛かりがつかめるのではないかとということも考えられた。

全体的に見て二ノ丸は、明治5年の城取壊し以降、ほぼ全域が民有地として払い下げられており（第15図）、畑・宅地などとして経過してきたことによる遺構への影響が感じられる。

建設予定地では、第1レベルに集石を発見したが、これは昭和の中頃までこの場所に建てられていた民家の遺構であることが確認された。最終レベルまでに遺物の取り上げは680点に及び、集石の数は22箇所、ピット37個を数えた（第3表 発掘調査箇所遺構等集計表）。また、集石とはいえないまでも、調査地内の第1・2グリッドには、つなりのつかない石がかなりの数出土した。しかし、土居の遺構並びに高遠城に関係があると思われるものは確認できなかった（建設予定地の調査区域割については第10図参照）。

汚水管理設置予定地では、幅1mのトレンチで、総延長約167mを最終的に調査した、管路第1トレンチから第3トレンチまでを設定し、それぞれのトレンチに落ち込みの箇所を発見した。特に第2トレンチの12m付近から始まる深い落ち込みは、保科氏時代以前といわれている「主図合結記」、並びに「千曲の真砂」に見られる高遠城の絵図の中で、当時南郭と二ノ丸を隔っていた空堀ではないかと思われる。

管路トレンチからの出土遺物は、第2トレンチからの出土は少なかったものの、全体で363点を数えた。また、遺構は、配石3箇所・集石14箇所とピット23個を確認したが、配・集石遺構については、幅1mの狭い範囲であるので、トレンチを横断しているものなどについての全容解明は難しく、今後の研究を待たなければならない部分である。また、ピットの中で樹木の根については、図面上で省いてある。

今回の調査は、記録保存のみの調査ではなく、高遠城の遺構については保存する必要があるので、遺構の保護処置なども合わせて第3節 遺構の中で述べる（第9図）。また、遺物については今後の再検討も必要と思われるので、平・断面図にドットマップ方式でおとし（第17～25図）、なおかつ遺物一覧表（第5表）を作成した。

第2節 遺構とその保護

(I) 便所建設予定地

昭和初期の二ノ丸の土地区画図（第15図）によるとほとんどの部分は畑で経過してきており、この図の中で便所建設予定地は2286番地の部分である。この土地は昭和38年に町有地となり、当時は500mほどの畑であった。その後史跡の指定以後の国土調査により、町有地部分は合筆され、現在の高遠町大字東高遠2286番地、9,762㎡となっている。町有地以前にここには民家があり、これに関係した遺構が第1レベル（第12～14図・図版6～9）であると考えられる。これより下のレベルは、ベルト断面（第18図・図版9）に見られるとおり黒褐色土を基調としたかく乱土層であり、遺物（第17・19図）は中央付近のゴミの埋設部分を除いて、調査区域内のほぼ全域から出土している。遺物のほとんどは陶磁器片であった、作られた年代や種別など混在して確認された。（第28図）

土居の遺構については確認できなかった。これは民有地に払い下げられた時点で、畑として機能できるように土居は取り払われ、長い時間の中で整地されているためではなかろうか。

ビットは集石下に見られたものもあるが、これは明治以降の民家の遺構に関連したものを始め、ゴミ埋設穴や水道管理設の際の掘抜き穴などがあり、他は遺物により明治以降のものであると判断できるビットであった。樹木の根によるものも多く確認された。

1) 集石No. 1, 2, 8, 10, 11, 12, 13, 16, 17, 18, 19 (第12, 14図・図版6, 7, 8, 9)

これは昭和の中頃までこの場所に存在していた中村三郎治氏の住宅遺構である。住宅の土台下グリ石の集石で、穴を掘り、石を詰め込んだもので、この上に土台石をおいたものと考えられる。表土下約15cm（H=804.4内外）の所にレベルが合っており、第12図に見られるようにつながりもある。円形で、形の崩れたものもあるが、直径50～70cm・深さ50cm程度で石の大きさにもよるが、だいたい1つの塊の範囲で、石の数が35～60ヶの範囲である。東高遠地区に在住する古老に聞き取り調査をし、記憶をたどってもらい見取り図を作成した。

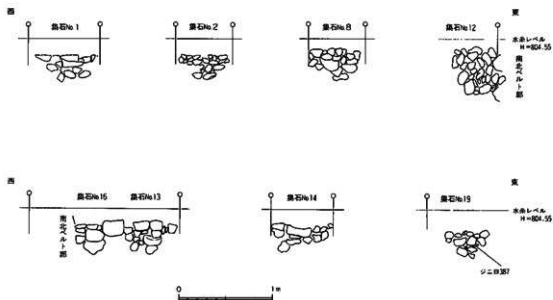
2) 集石No. 9 (第12図・図版6, 8)

同じく中村住宅に関係した遺構であると思われ、位置は部屋の角に当たる。レベルはグリ石とほぼ同じ高さであり、これより下の層に石の点では関係していない。遺物が同時に出土しており、コンクリートブロック、昭和に入ってからとおもわれる陶器製のスリ鉢片、アルマイト製の銅蓋等といっしょに、亜鉛鉄板製の煙突がつぶれた状態で出土した。

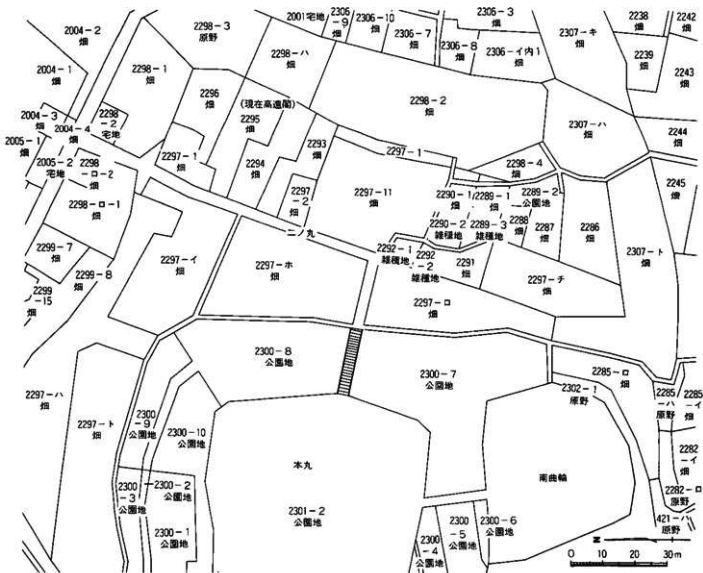
3) 集石No. 5, 6, 7 (第12図・図版6)

この集石も中村住宅のグリ石とほぼ同じレベルに始まっているが、最終レベルの深さ約1mまで続く深い集石でテフラ層に食い込んでいる。古老からの聞き取り調査により、この位置に外便所があったということが解った。

重ねて見ると最下層の東側の石は、直線に並べられているようである。この周囲は石の出土がめだつて多く、遺物についてみると、角釘、内耳鍋のかけらなども出土しているが、最下層までかく乱されているらしく、明治以降の磁器片も同レベルから出土している。



第14図 便所建設予定地集石断面実測図（第1レベル）



第15図 高遠城跡ニノ丸周辺の土地区画図（昭和初期頃）

4) 集石No15 (第12図・図版6)

この集石下に水道管が埋設されていることから、明らかに近年水道管埋設の際、水道管の固定のため置いた集石である。尚、バルブの位置には直径8cmの土管が縦に埋設されていた。

5) 集石No20, 21 (第12図・図版6・9)

集石と共にゴミが埋設されている部分である。遺物は集石No20についてはポリエチレンの包装材が多量に出土し、集石No21についてはスチール製のコーラの空き缶、釜飯の器、ピン類が出土している。

6) 集石No3, 4, 14 (第12図・図版6)

この4ヶ所の集石は、いずれも中村住宅に関係したものと同レベルであり、このレベルより下層に影響を与えていない、石の大きさもまちまちであり、周囲につながりが無いことからこの民家に関係するものか、あるいはその時代以降の遺構と思われる。

7) ビットNo1, 3, 4, 5 (第16図・図版10)

これらのビットは、縁から底まで7~10cmと比較的底が浅く、堅く締まっており、民家のグリ石の直下であることから、集石No8, 10, 12, 13にそれぞれ対応する、グリ石埋設の際の掘り抜き穴と考えられる。

8) ビットNo2 (第16図・図版10)

深さ15cmで、側・底面ともに柔らかかである。集石No9もあり、新しい磁器片が出土していることから、この民家に関係した遺構と思われる。

9) ビットNo12, 13 (第16図・図版10)

深さ20cm、底は堅く双方がつながりを持っており、両側に切れ込んでいる。集石No5, 6, 7の直下であり、民家の便所の遺構であると思われる。遺物は古い物と新しい物が混在して出土しているが、比較的遺物集中地区であり、遺物による裏付けもできた。

10) ビットNo6 (第16図・図版10)

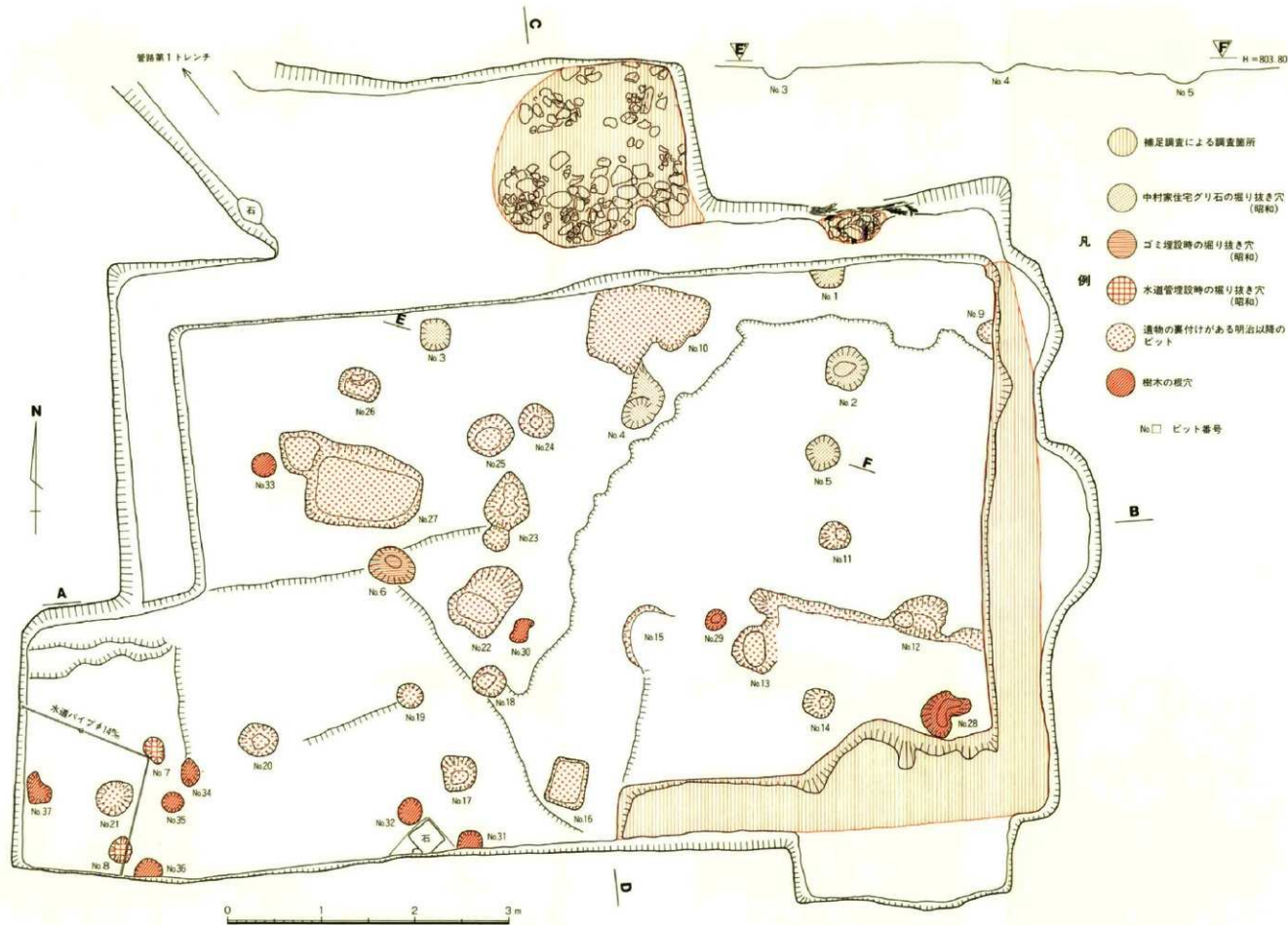
集石No21のゴミ埋設時の掘り抜き穴である。深さは25cmで、底は柔らかい。

11) ビットNo7, 8 (第16図・図版10)

水道管埋設時の掘り抜き穴である。深さは共に10cm程度で柔らかかである。

12) ビットNo9, 10, 11, 14~27 (第16図・図版10)

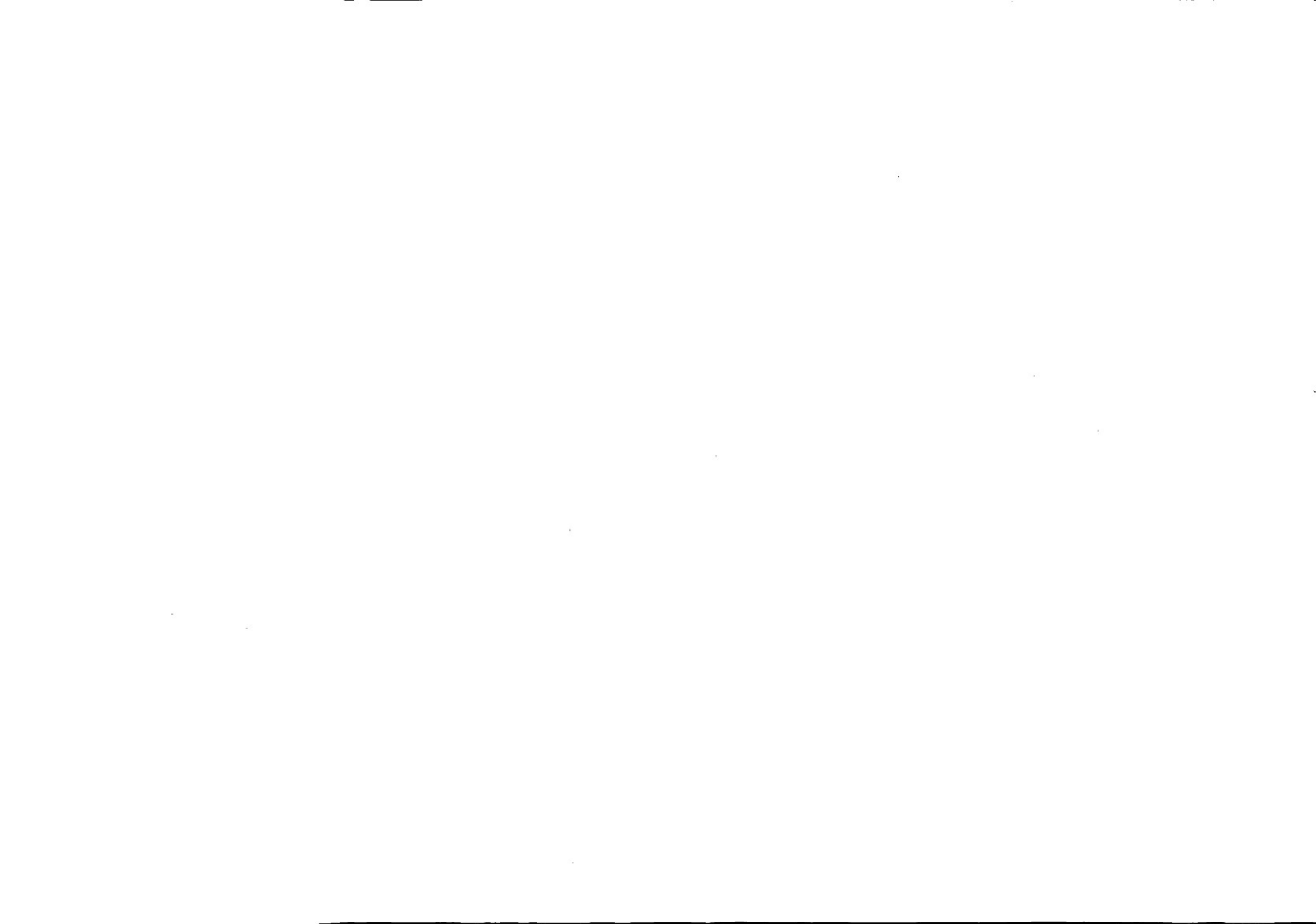
これらのビットは深さ5~20cmで、それぞれ形状が異なりつながりが見受けられない、底についてはそのほとんどが柔らかかである。この土地は、民間に払い下げられた段階で土居は取り払われ、だんだんに整地され、平らにならされてきているものと思われる。明治以降の新しい遺物が出土しているので、これにより明治の城取壊し以降に作られたビットであると判断できる。

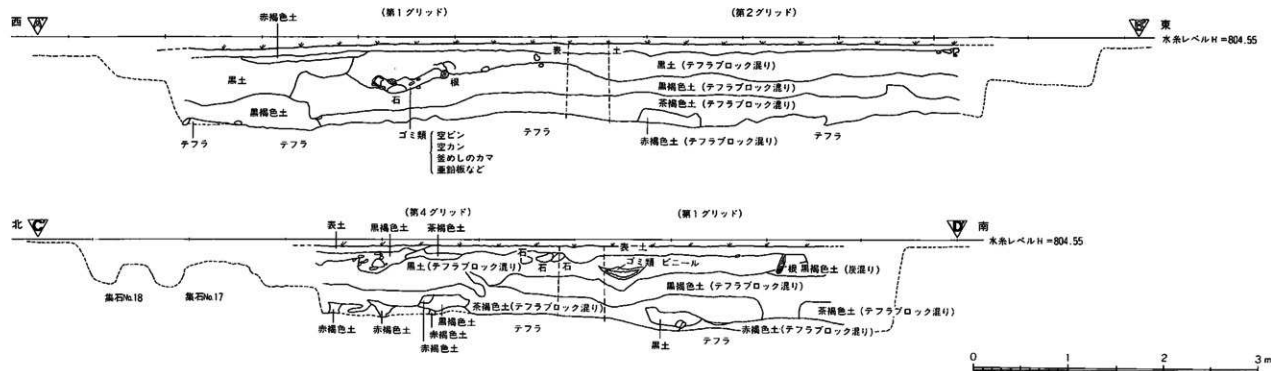


第16図 便所建設予定地平面実測図 (最終レベル)

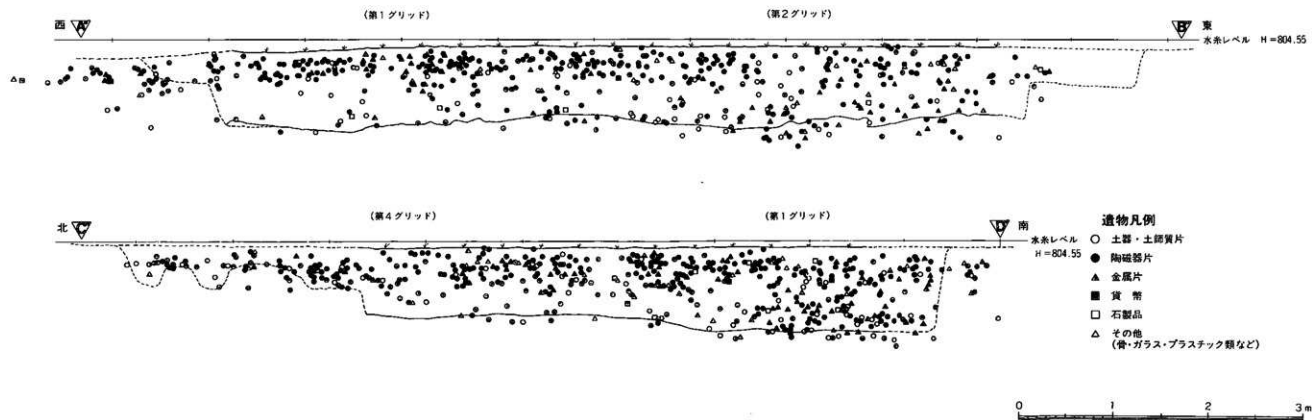


第17図 便所建設予定地遺物出土状況平面図

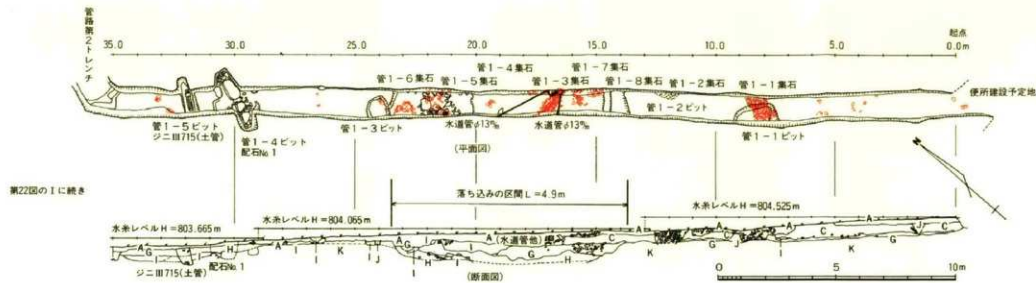




第18図 便所建設予定地断面実測図



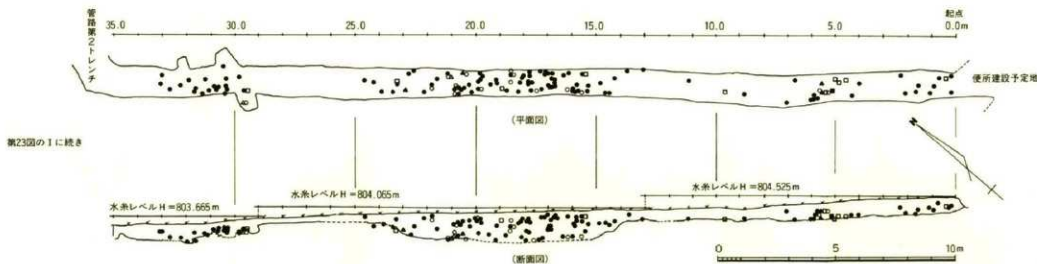
第19図 便所建設予定地遺物出土状況断面図



凡 例

A: 表土 B: 黒土 C: 黒褐色土 D: 暗褐色土 E: 褐色土 F: 灰褐色土 G: 茶褐色土 H: 茶褐色土(テフラ混り) I: 赤褐色土
J: 赤黒混り擾乱土 K: テフラ層 L: 川砂 M: 山砂

第20図 管路第1トレンチ平・断面実測図(赤色は調査第1レベル石出土状況)

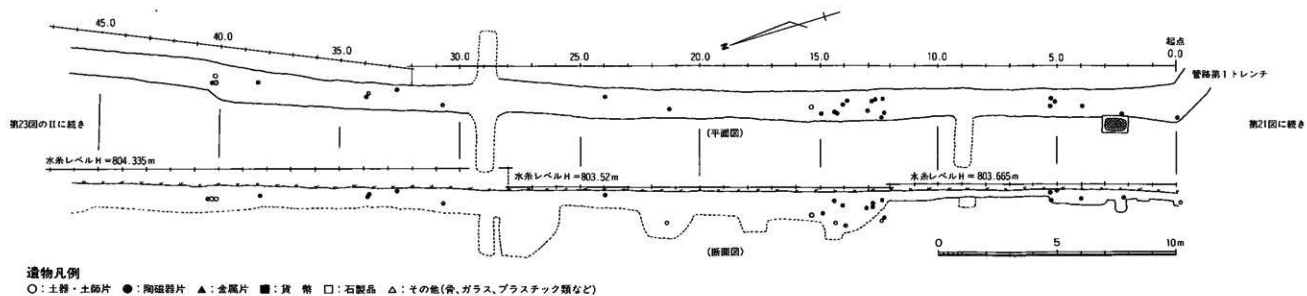
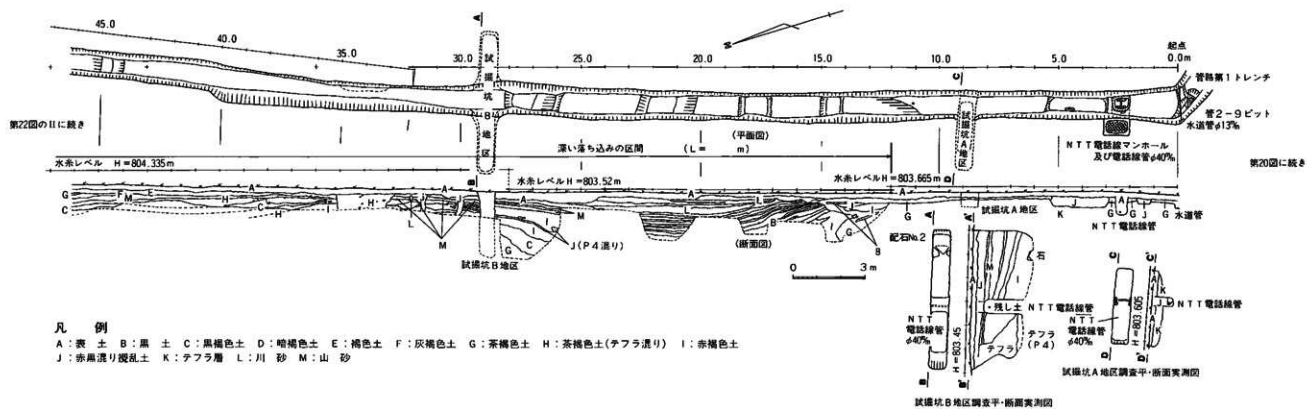


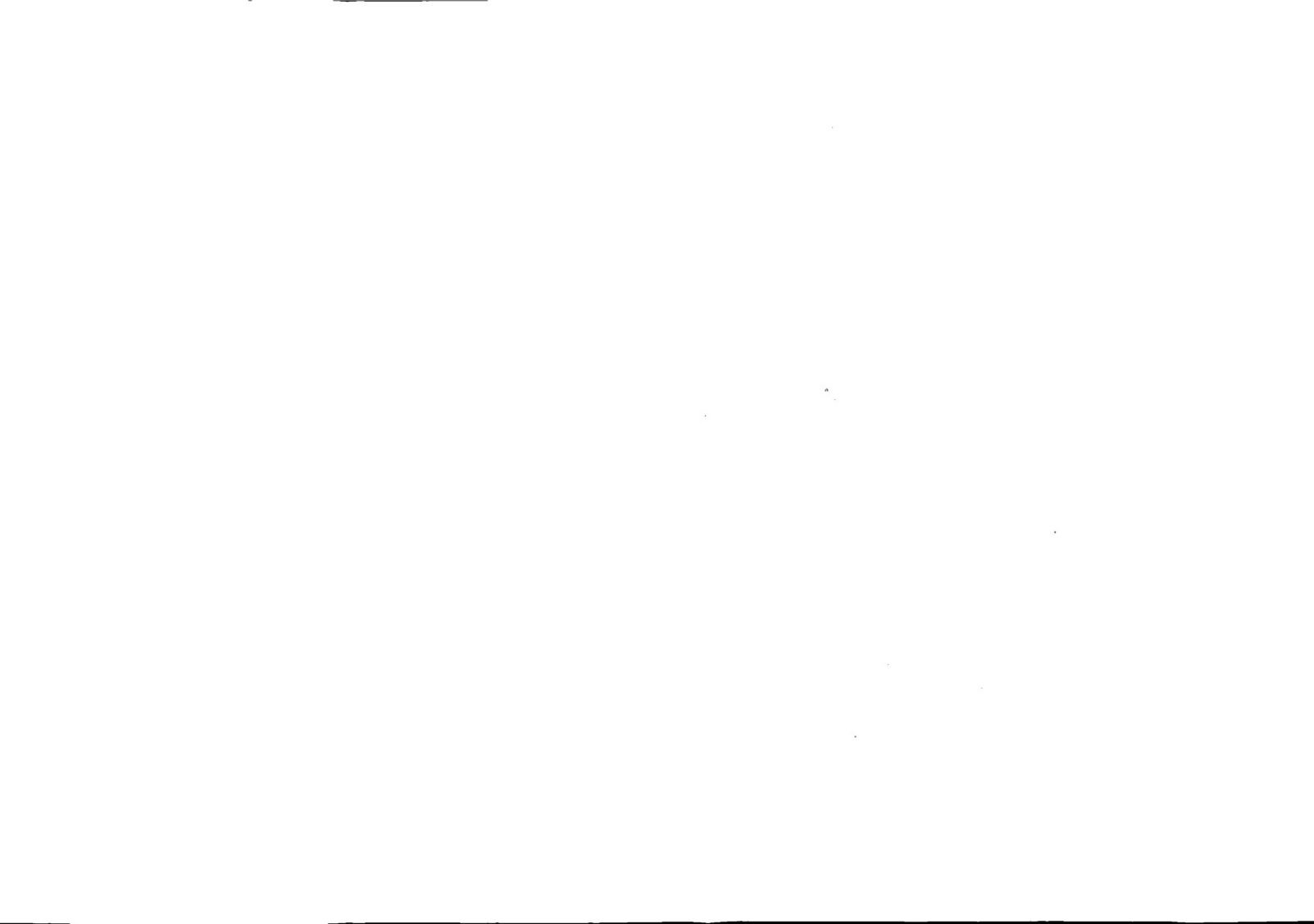
遺物凡例

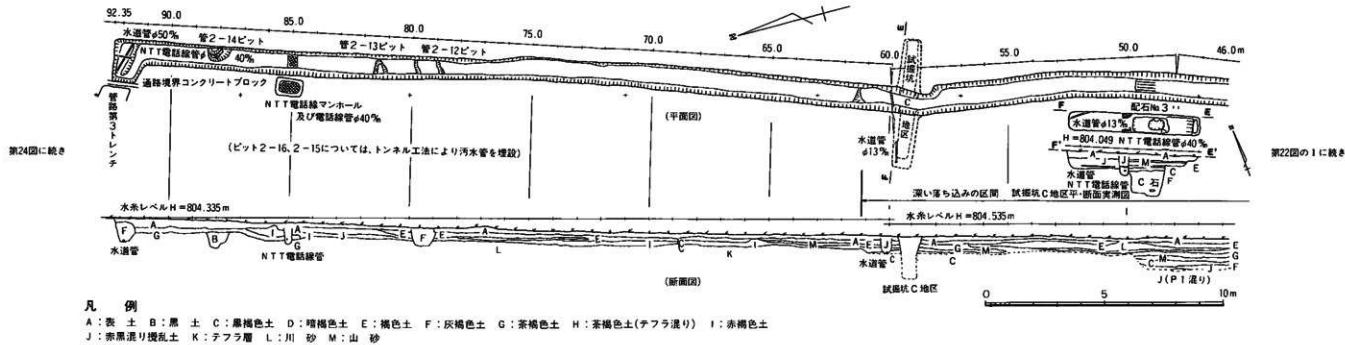
○: 土器・土師片 ●: 陶磁器片 ▲: 金属片 ■: 貨幣 □: 石製品 △: その他(骨、ガラス、プラスチック類など)

第21図 管路第1トレンチ遺物出土状況平・断面図

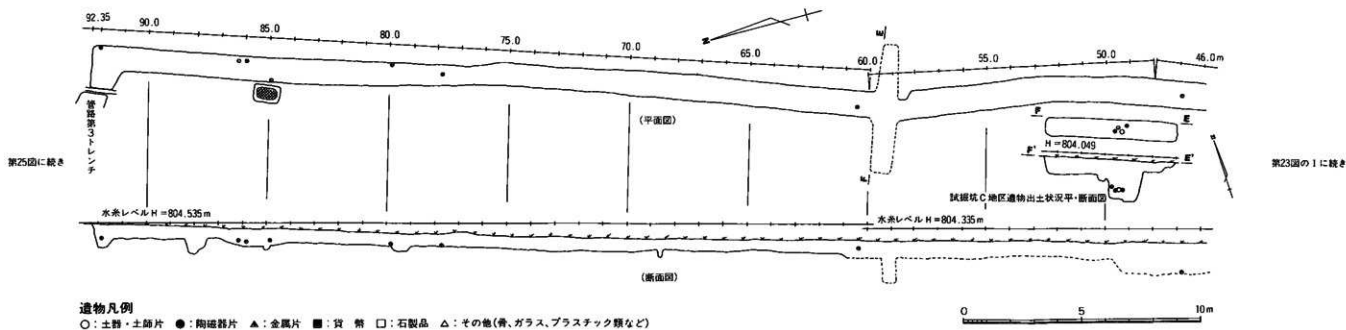




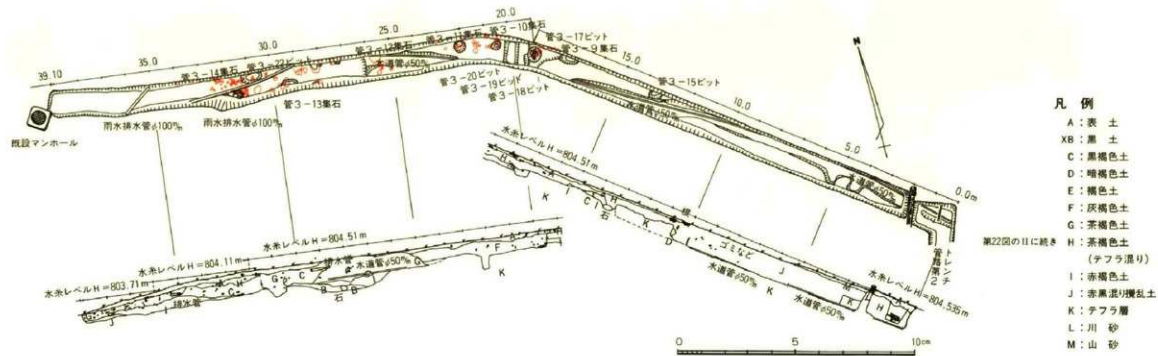




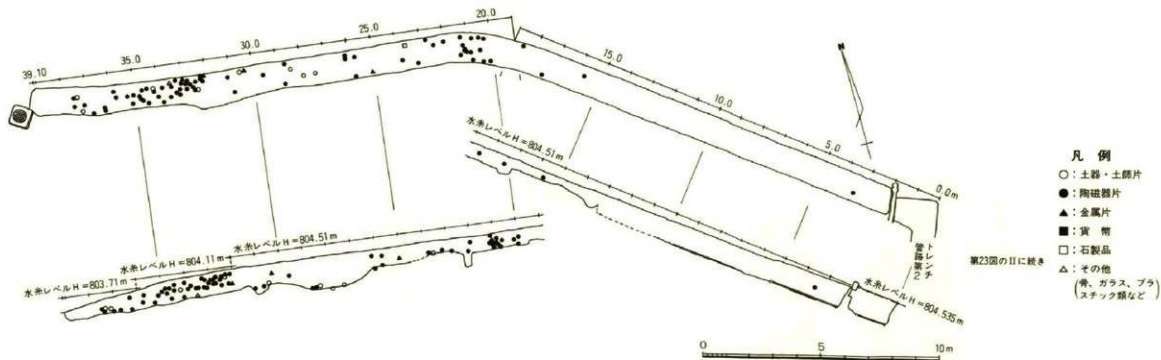
第22図-II 管路第2トレンチ平・断面実測図



第23図-II 管路第2トレンチ遺物出土状況平・断面図



第24図 管路第3トレンチ平・断面実測図(赤色は調査第1レベルの石出土状況)



第25図 管路第3トレンチ遺物出土状況平・断面図



13) ビットNo28～37 (第16図・図版10)

これらのビットについては樹木の根跡であると確認された。

(II) 管路第1トレンチ (第20, 21図・図版7, 10, 11, 14)

管路第1トレンチは、城郭の図中で位置は示されていないものの、西洋糟古場、厩、米蔵等が見られる。このトレンチの真ん中あたりは、すでに平成4年度に取り壊されているが、飲食店が並んで建てていた場所である。調査の中では城の建物に関係していると思われる遺構は確認できなかった。起点から14～23m地点まで落ち込みを確認した。この落ち込みからは17世紀代と思われる陶器製の丸碗やかわらかけなどが出土している。幅1mの範囲なので、南北につながりを持っていると思われるが定かではない。この落ち込みについては、汚水管の埋設深度が浅いため影響はないと思われる。

同じくトレンチ終末(西側)に南北の向きに検出された、石垣の基部と思われる配石No1(第20図・図版11)については、現在の二ノ丸が高遠閣の部分が高く、その他の部分は一段低く、割と平坦な地形をしているため解りにくいが、幕末に近い文化文政期の絵図を見ると、二ノ丸は東側の約半分を塙で仕切っており、一段高くなっていたようである。高低差については想像の範囲を出ないが、昭和初期の頃石垣は高遠閣前から南側にかけて存在していたようである(図版15)。これが江戸期のものかどうかは確認できないが、この遺構からは新しいと思われるガラス製の一輪挿しなどが出土している。いずれにしろ城に関わる遺構である可能性は大きいので、現状のまま保護するため川砂を入れ、配石上に汚水管を埋設することとした。また、この配石跡の西側約2mの所から、土管が南北方向に向いた形で出土している。(ジニⅢ715・図版5)これについては遺物として取り上げ、代替えのパイプを同所に埋設し、後日の位置確認ができるよう配慮した。

なお、この部分は設計変更のため盛り土となり、管路の左右に約1mの幅で約20cm程度の土を盛るため、現地表面を確認する透水性のシートを挟み込む工法を取りたい。埋設深度が浅く、冬期間は凍結が予想されるので、冬場はこの便所に限り閉鎖する処置を取りたい。

1) 管1-1集石・管1-1ビット (第20図・図版11)

トレンチを南北に横切る集石で、表土からテフラ層を掘り込み1-1ビットを形成している。石は大きくても10cm大で河原石の角の取れた形状。このトレンチ幅で719ヶを数えた。表土から続く集石であるため、近年の暗渠排水の施設ではないかと思われる。

2) 管1-2集石・管1-2ビット (第20図・図版11)

このトレンチ調査範囲内で南へ続く部分を断たれている。やはり表土からテフラ層を掘り込み1-2ビットを形成している。石は5cm大で河原石の角の取れた形状をしている。表土から続く集石であるため、近年の暗渠排水の施設ではないかと思われる。

3) 管1-3集石 (第20図・図版11)

1-1集石と同様の形状をしているが、深さ50cm程度でわずかに西南の方向に向いてトレンチを横切っている。上記と同じく表土から続く集石であるため、近年の暗渠排水の施設か、通路のための敷きジャリではないかと思われる。この集石はトレンチ範囲内に227ヶの石を確認した。

4) 管1-4、1-5、1-6集石(第20図・図版11)

これらの集石は落ち込み区間内の西側に位置し、南北につながっている可能性もある。層位は表土から3層目の茶褐色土層にあたり、深度80cmから集石が顔を出す。1-4、1-6集石は下へのつながりが認められないが、1-5集石については、上部に直径20cm程度の石が、トレンチを横切る格好で幅1m程の帯状となっている。この下層の、表土から約1m下がった所は、直径50cmの平石を中心として、15~30cm大の石が集石されている。この層から17世紀代の丸碗(ジニIII 598、611・図版3)や、かわらけ(ジニIII 604・図版4)などが出土していることを見れば、城に関係した遺構とも思える。

5) 管1-7、1-8集石(第20図・図版11)

この集石は落ち込み区間内の東側に位置し、南側は調査区内で断たれている。層位は表土から2層目の茶褐色土層にあたり、深度50cmから始まり、90cmまでのこの層の間内にある。出土遺物は、集石上部に明治以降の新しい遺物が認められる。いずれにしろこの落ち込みの区間は遺物の包含層であり、特に第2層以下は江戸時代以前と思われる遺物が多いことから、城に関わる遺構であると考えられる。

この落ち込み区間は、幸い汚水管埋設深度が浅いため、保護する事が可能であった。

6) 管1-3ピット(第20図・図版11)

この遺構は24m地点に確認された、調査区内で北側が切れており、南側はつながりがあるが、どの程度かは推測できない。東側は落ち込みの肩を切り取ってしまっている。南側の断面から見ると、表土から掘り抜かれたもので、遺構内から出土している遺物も、昭和に入ってからのものである。

7) 配石No.1・管1-4ピット(第20図・図版11)

管路第1トレンチ西側の終末の30m地点に確認された遺構である。南北の方向に一列に配石されており、西側は配石上部から約40cmテフラ層を切り込んだものと思われる。この配石の東側は落ち込みの部分から、テフラ層が表土下20cmの位置まで残っており、配石の手前50cmのあたりから、配石に向かって約25cmほどの段差で落ち込んでいっている。テフラ層が東側に残っていることから、西向きの石垣がこの上部に積まれていたのではないかと想像できる。配石の主になっている石は、長さ90cm、幅40~50cm、高さ30cmの長方形の物が1ヶ、長さ40cm、幅40cm、高さ25cmの台形の物が2ヶ並んでいるが、周囲には細かい石も出土した。限られた範囲の調査であるため、全容は解明できなかった。

この配石西側のテフラを切り込んだ層から、ガラス製の輪挿しなどの明治以降の遺物が出土しているが、先に述べたように、現在は残っていても城取壊し以降しばらくの間、この遺構が残っていた可能性もあるので、集石の上に汚水管を通し遺構を保護する処置を取った。

8) 管1-5ピット(第20図・図版5、11)

遺構は32m地点にあたり、この場所から出土した土管(ジニIII 715)を埋設の際に掘り込まれたピットである。配石No.1より西に2mほど寄った位置から出土している。方向は配石遺構より、南へ行くほど西へ開いてきている。この土管の両端は破壊されており、つながりがあるかどうかは不明であるが、ちょうどつなぎの部分が出土しており、土管の北側部分が彫れてもう一方の土管をはめ込んでいる。北から南へ流れていたものと思われるが、土管内部は土が詰まった状態であり、はめ込んだ外側から粘土をおしつけ、漏水しないようにしてあった。取り上げ復元すると1本分の土管の実測をすることができた。

配石No1からこの土管までの間も、遺物が集中して出土している場所であるが、磁器、在地産の瓦などであり、明治以降のかく乱があった層であると考えられる。

土管については、文化9年(1812)の内藤頼以公の藩主時代に、東高遠の樋ヶ沢から城内へ水を引くため土管を焼き、これが高遠焼の発祥になったとの史実があり、これらの土管については東高遠地区内でいくつか発見されており、文化11年の銘が入り高遠町の郷土館にもその一つが展示されている(図版15)。詳しくは次の遺物の項で述べるが、これとはまったく異なるものであり、胎土や焼き方からして在地製の瓦と同等の物と思われ、明治以降に埋設されたものではなからうか。

(Ⅲ) 管路第2トレンチ(第22-I~23-II、28図・第4表・図版12、13、14)

管路第2トレンチについては、城として機能していた当時も、通路として使われていたとの考え方が強かった。

試掘トレンチ3ヶ所を行ない、近年のかく乱であるNTT電話線管路位置の確認をしながら調査を行った。幅1mのトレンチでは確認は難しいものの、起点より12~62m地点までの深いかく乱層が現れ、保科氏以前の時期の空堀跡と考えられる。この深い落ち込み部分を中心に第2トレンチについて報告する。

保科氏以降現在まで、城郭そのものには大した変化は見られないものの、保科氏以前といわれているので、武田氏が最初に城を構えた頃かもしれないが、この二枚の絵図(第26図)を見ると、それ以降に比較して大きく異なる点として、笹郭が城郭の一部として機能していないという事と、本丸と二ノ丸の間が土橋で結ばれており、南郭が現在と比べて東側に大きく伸びて、本丸入り口付近から東の方向へ空堀が二ノ丸を貫いている。この空堀の跡が今回12m付近から始まる深い落ち込みの部分ではないかと考えられる。しかし、北に向かったトレンチに対してほぼ直角に現れてくるべきであると思うが、50mに渡ってでは幅が長すぎ、断面図から判断すれば、かく乱土層が上がっていつている試掘坑B地区の30地点までではなからうか。竊状にきれいに積み上がった層であるが、この層の表土付近は落ち込みの層から3m北へ寄って始まっている。手前付近からは遺物の出土が見られるが、明治以降と思われる遺物が表土下1.4mまで出土しており、近世のかく乱がこの部分では考えられる。

また、30m以北の断面については、33m地点に幅2mほどの近年のものと思われるかく乱地区があるが、平坦な層で推移している。これらの判断は後日の調査に委ねたい。かく乱されている層が深く、無為層までの調査は行われていない。断面には調査区域を点線で記入した。

第2トレンチにおいては、NTTの電話線管路に沿ってトレンチを設定したので、この管の裏下に汚水管を埋設するように検討した。NTTの電話線管は地表から約70~80cmの深度で埋設されており、深さ約1m、幅約35~40cmの範囲がかく乱されている。特に12m地点の落ち込み等は、厩の部分が、NTTの管路埋設により破壊されているので、この管下に汚水管を埋設し、遺物を傷つけない配慮をしたい。

なお、47m地点の地質断面を第4表に分析した。この結果による所見は下記のとおりである。

- ①-10~50 三峰川の川砂(自然堆積層とは考えられない)
- ②-70 ATと思われる火山ガラスが混じった風化岩片
- ③-90 花コウ岩類の風化物と思われる。
- ④-110~150 御岳の新しい火山灰が主であり、ATの火山ガラスが混入
(第1表の-50~70あたりか? Pm-1よりは上位に位置していたものと思われる。)
- ⑤-165 御岳第1テフラを主とする。
- ⑥-170~190 ④とはほぼ同じ。

1) 配石No.2 (第22-I・図版12)

第2トレンチ設定時の30m地点、試掘坑B地区に出土した配石跡である。北側の断面はかく乱土の地層が東側に傾斜し、東側の断面は南向きに傾斜している。この地区から遺物は検出されていない。配石は試掘坑東側の地表下2.3mの所に3ヶが並べられた状態であった。限られた調査範囲であるので後日の検討が必要であるが、南北につながっている可能性もあり、配石はそのまま保存した。また、この坑の西側部分に無為層を確認している。

2) 配石No.3 (第22-I・図版12)

第2トレンチ設定時の60m地点、試掘坑C地区に出土した配石跡である。この地区から出土した遺物は、戦国時代と思われる遺物と、明治以降と思われる遺物が混在している。配石は試掘坑東側の地表下1.5mの所に20cm大の石2ヶを確認している。限られた調査範囲であるので後日の検討が必要であるが、南北につながっている配石No.2と関係のある可能性もあり、配石はそのまま保存した。

3) 2-9ピット (第22-I・23-I図・図版12)

このピットは水道管理設時の掘り抜き穴である。第2トレンチ起点に出土した。ピットの形状は複雑であり、西側に広がっているようである。全容を解明できないが、明治以降の遺物の出土もあるので城に関係した遺構とは思われない。

4) 2-12ピット (第22-II・23-II図・図版12)

第2トレンチ79m地点に確認された。東西につながっていると思われるピットである。テフラ層に約25cm入り込んでおり、幅約1mで断面は表土から灰褐色のかく乱土、遺物も明治以降の新しい物が出土している。

5) 2-12ピット (第22-II・23-II図・図版12.13)

81cm地点に確認されたピットであり、調査区域内で東側は切れている。幅50cmで、テフラ層に約27cm入り込んでおり、南側の断面ははっきりしないが、表土下から落ち込んでいる。遺物等の裏付けがなく、城に関する遺構かどうかは判然としませんが、工事の中では遺構として保存する処置を取るため、トンネル掘りにより遺構下に汚水管を埋設した。

6) 2-13ピット (第22-II・23-II図・図版12.13)

88m地点に確認されたピットであり、調査区域内にとどまらず東側につながっている。テフラ層を約65cm削り込んでおり、断面に見られるとおりテフラ層より上につながってはずに、ピット内は黒土であった。遺物等の裏付けはなく、城に関する古い時代の遺構かどうかは判然としませんが、工事の中では保存する処置を取るため、トンネル掘りにより遺構下に汚水管を埋設した。

(IV) 管路第3トレンチ (第24.25図・図版11.12.13)

管路第3トレンチは、高遠開前から既存の便所まで、水道管の布設がされていることから、このルートを確認しながらトレンチを設定し、調査を行なった。水道管は26m付近まで確認した、これ以西は北にルートを変えてしまっているので、既存の汚水管マンホールまでを直線で結んだ。29mと35m地点に配水管の埋設ヶ所を確認し、埋設深度は40cm程であった。

水道管のルートである起点から15m地点まで遺物は少なく、13mから25m地点までの遺構については、遺物は明治以降に比定される新しい物と、古いものが混在していた。土層は灰褐色土である。この場所は、南側が水道管が確実に通過しているため、補足調査を行い、遺構がない事と、水道管の位置を確認し、汚水管をこのルートに埋設し、管3-15-3-20までのこれらの遺構を保護した。

26~31m地点までに落ち込みを確認した。この落ち込みの最終面からは、明治以降の新しい遺物が出土している。また、これ以降西側部分も時代的にはかく乱されて、遺物が数多く出土していることも考えれば、水道や汚水管などの埋設が集中している地区だけに、明治以降何度もかく乱されてきた経過があるのではなかろうか。

1) 管3-15ピット (第24図)

管路第3トレンチ13.5m地点。直径40cm・高さ15cmの丸石が、テフラ層に埋め込まれた状態で出土している。南側は水道管理設の際の掘り抜きにより破壊されているが、壁は残っており、遺物の出土は見られなかった。

2) 管3-9集石・管3-17ピット (第24、25図・図版13)

18.5m地点に確認された。直径30~32cmの円形のピットに集石されており、この上部にも集石が見られた。このピット内から遺物は検出されなかった。この西側はテフラ層が10cmほど一段高くなっている。

3) 管3-18ピット (第24、25図・図版13)

起点から20mの位置にあり、ちょうどトレンチがくの字形にまがった頂点の場所である。幅約80cmの帯状でテフラ面に東側は15cm西側は8cm程入り込んでおり、これより第2層目が灰褐色土層として西側に続き、南北につながりがある。このピット内から、昭和になってからと思われる遺物が検出された。

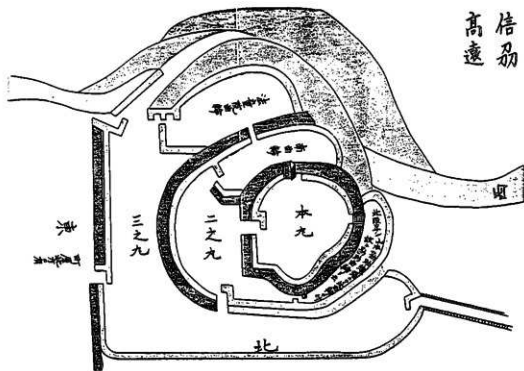
4) 管3-10、11集石・管3-19、20ピット (第24、25図・図版13)

集石については地表下約20cmの範囲であり、トレンチの20~30mの間に出土した集石である。集石はピット上だけでなく関係があるかもしれない。ピットは20.5と22mの地点である。どちらも直径40cm前後で、底部は20cmを計り柔らかい、深さは異なり3-19はテフラ面から38cm、3-20は67cmである。このピットの近くの最下層からは、明治以降の遺物も出土している。この2ヶ所のピットについての関係はつかめないが、工事にあたっては南側の水道管ルートを通るため、これらの遺構は保存される。

5) 管3-12・13・14集石・管3-22ピット (第24、25図)

前に述べた26m地点から始まる落ち込みより、西の部分から出土した集石・ピットである。落ち込み部分は約5mで表土からの深さは中央で1.3mあり、1mのトレンチでは確認できないが、南北につながっている可能性がある。地層も落ち込んでいっている部分と2段階に分かれそうだが、地表下1.8mより上は水道管理設のためのかく乱層である。この落ち込み部分を始め、ピット内、西側の遺物包含層から、内耳鍋片などの比較的古いと思われる遺物と一緒に、昭和に入ってからの遺物が混在して出土している。集石は3-14を除いて出土したレベルもまちまちであり、意味をなしている集石とは思われない。また、集石1-14については、排水管下に確認されているが、西から東に向かっているようであり、第1レベルより下は検出されなかったため、近年の歩道の敷石ではないかと考えられる。

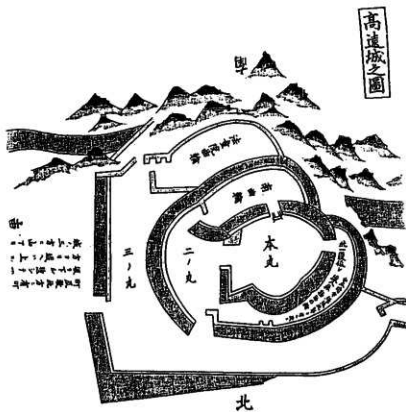
倍易
高遠



○主圍合結記

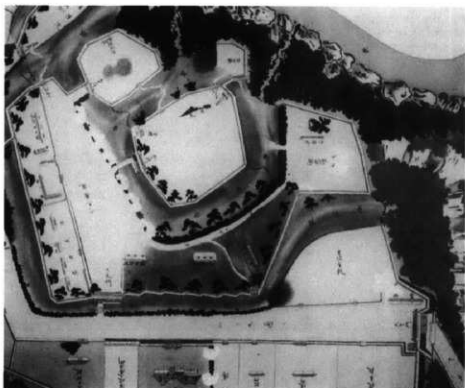
現在高遠城図として残っている絵図の中では最も古いものと思われる。築城当時の縄張りと思われる図である。

(A)



主圍合結記の図とほとんど同じである。

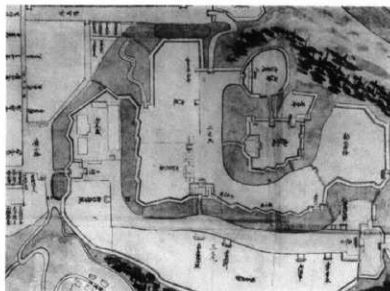
第26図 高遠城城郭絵図 (B)



この図は幕末に近い文化文政期の図であるが城郭等については前図享保10年の図と大差はない。

(C)

慶応～明治

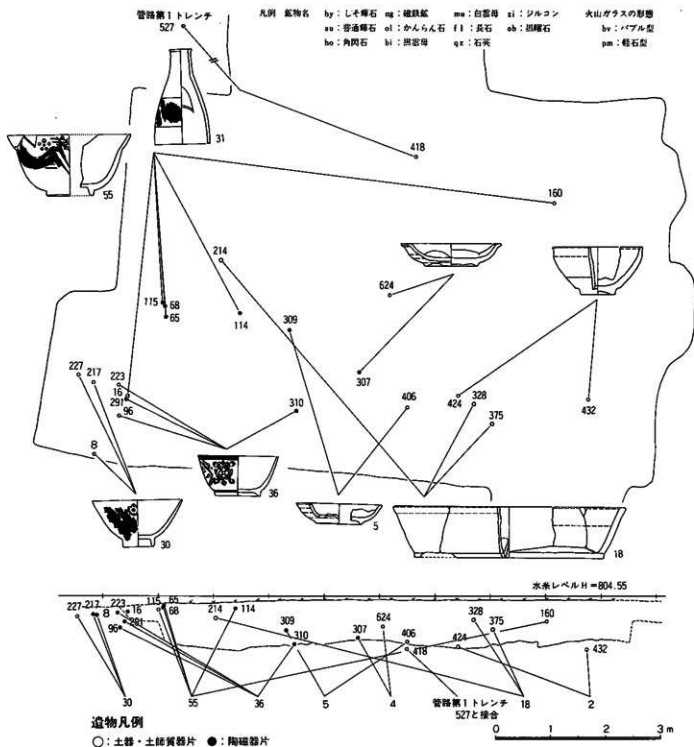


高遠に現存する絵図で最も現代に近く、商標直前の図である。

第27図 高遠城城郭絵図(D)

第4表 管路第2トレンチ47m地点土質試料分析結果

番号	採取場所	緑土(火山)%	砂%	火山岩片%	非火山岩片%	主な鉱物	gの形態	番号2	特徴・その他	ノモ
1936	.-10	2	0	0	98	hy ho mg		1936	外層の磁石を含む1	三峰川の砂と同じ
1937	.-30	2	0	0	98	mg au		1937	外層の磁石を含む1	三峰川の砂と同じ
1938	.-50	0	0	0	100			1938	外層の磁石を含む1	三峰川の砂と同じ
1939	.-70	2	2	0	68	fd bi > qt > hy > mg > au > ho	bw	1939		風化岩片 > 御岳火山灰・AT
1940	.-90	0	0	0	100	fd bi > qt > ho		1940		花こう岩類の風化物のみ
1941	.-110	5	5	8	10	fd hy > qt > mg > au (ho, bi)	bw	1941	灰-黒コークス状岩片	御岳火山灰 > 風化岩片・AT
1942	.-130	85	2	8	5	fd hy > qt > mg > au (ho, bi)	bw	1942	灰-黒コークス状岩片	御岳火山灰 > 風化岩片・AT
1943	.-150	80	5	10	5	fd hy > mg > qt > au (ho, bi)	bw	1943	灰-黒コークス状岩片	御岳火山灰 > 風化岩片・AT
1944	.-165	85	5	5	5	fd > qt > mg > ho > hy > bi	pm	1944		御岳第1テラフを主とする
1945	.-170	83	2	10	5	fd hy > mg > au > qt (bi, ho)	bw, pm	1945		御岳火山灰を主とする。bwはATか?
1946	.-190	83	2	10	5	fd hy > mg > au > qt (bi, ho)	bw	1946		御岳火山灰を主とする。bwはATか?



第28図 便所建設予定地出土遺物接合図

第3節 遺物

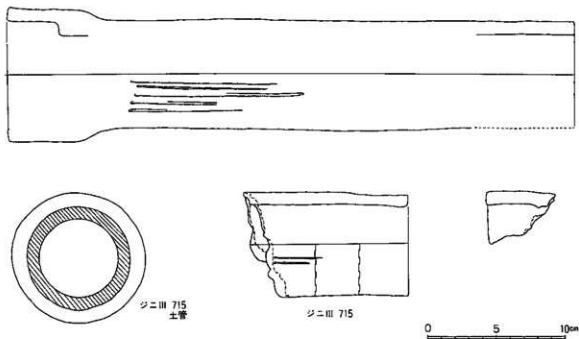
今回の調査では、便所建設地を含め埋め土と思われる部分に遺物が集中している。土層はかく乱土層で、何回にもわたって、かく乱が繰り返されているのではなかろうか。遺構と関わりがあるものについては前の節で述べたので、ここでは異なる時期に製造された陶磁器の類についてあげ、出土状況については第17～25図にドットマップ式に記録し、さらに第5表に遺物一覧表を掲載した。特に便所建設予定地における土層のかく乱の状況を、現すものの一つとして第28図遺物接合図を作成した。なお、第29～33図については実測図であり、図版2～5は遺物の出土状況、図版16～22は遺物の写真図版である。これらについては、小数字で遺物番号を付したので、遺物一覧表を参照していただきたい。

1. 遺物番号261は、中国竜泉系の印花文の青磁の碗である。時代は鎌倉時代14世紀頃と考えられる。
2. 遺物番号706-1は、灰釉陶器の平碗である。産地瀬戸・美濃と考えられる。製作年代は大窯期の終り頃、15世紀後半と思われる。
3. 遺物番号608は、壺形陶器の頸部の破片。外面に灰釉が施されている。内面には錆釉が見られる。産地は中国ではないかと思われる。時期は明の頃である。
4. 遺物番号424・432は、天目茶碗である。腰部及び底部に錆釉が施され、内外面には天目釉が美しく施されている。産地は美濃と考えられる。製作年代は15世紀後半と思われる。
5. 遺物番号736-2は、搦鉢の底部。錆釉が施されている。産地は瀬戸・美濃。時期は16世紀前半頃と思う。
6. 遺物番号323は、搦鉢の底部破片。櫛目が判然としない。産地は瀬戸・美濃。製作の年代は16世紀後半頃か。
7. 遺物番号322・380-2は、灰釉陶器の丸皿の底部破片である。産地は瀬戸・美濃。製作年代は16世紀前葉から中葉か。
8. 遺物番号307・624-2は、灰釉陶器の丸皿の底部破片である。底部に重ね焼の痕が見られる。時期は16世紀中葉頃。
9. 遺物番号429は、内耳鍋の耳の部分破片である。産地は現在のところ不明。時代は17世紀初頭頃と推定される。
10. 遺物番号214・328・375は、土師質の平鉢の底部の破片である。胎土及び焼成から内耳鍋と同時代と考えられる。産地不明。
11. 遺物番号604-1は、土師質の糸切底のある皿である。産地は不明。時期も不明である。
12. 遺物番号294は、土師質の素焼きの皿である。底部に糸切痕が見られる。産地は不明。時期も不明である。
13. 遺物番号704-1は、青磁の皿と考えられる。釉は長石らしい釉が施されている。産地は中国ではないか。時期は不明である。
14. 遺物番号695-1は、折縁皿の破片である。器内に連弁文が描かれ全面に灰釉が施されている。産地は瀬戸。時代は16世紀後半頃。
15. 遺物番号301は、天目茶碗の口縁部破片、釉は天目釉、口縁部の型式から17世紀初頭頃と考えられる。産地は瀬戸・美濃か。
16. 遺物番号605は、灰釉陶器の碗。器内面にやや青味がかった長石釉が施され、腰の部分に錆釉が見られる。産地は唐津ではないかと考えられる。時期は17世紀前半頃と思われる。
17. 遺物番号266は、志野皿。見込部分に菊の印花文が施されている。器面内外に長石釉が施されてい

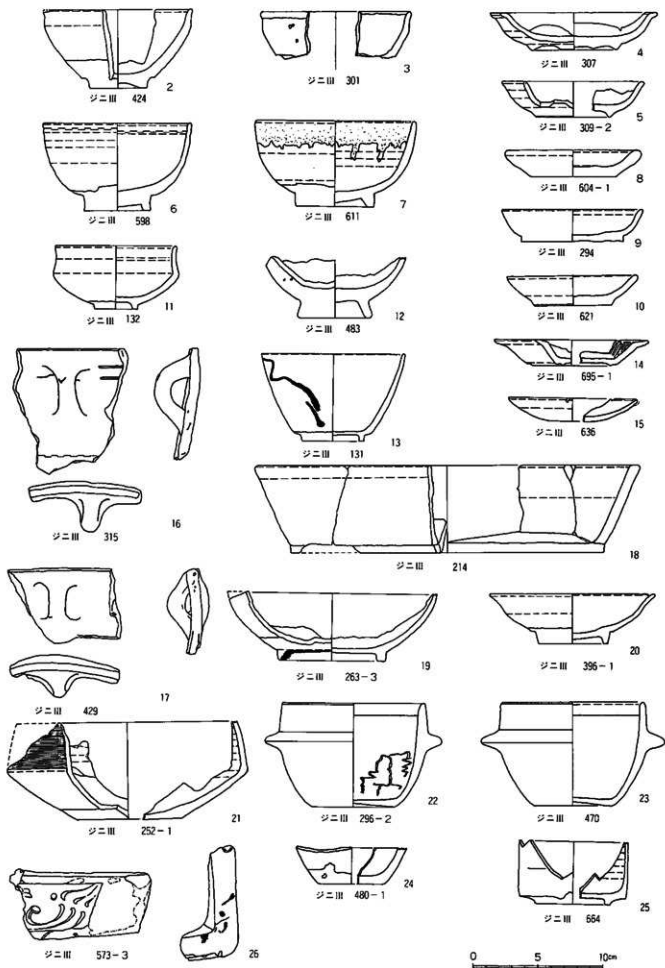
- る。産地は美濃。時期は17世紀前半と考えられる。
18. 遺物番号112は、緑色釉が施されている折縁皿と考えられる。産地は美濃、時期は17世紀前葉頃と思われる。
 19. 遺物番号107 盤皿。鉄釉と灰釉が掛けられている。口径が約30cm程の大皿の分類である。象嵌、三島手と言われているもの。産地は肥前。時期は17世紀。
 20. 遺物番号598 鉄釉陶器の碗。天目茶碗に見られる程の碗である。口径は11.3cm、高さ6.3cm、高台は削り出し高台で無釉である。内面は一見油滴天目と見られる程である。産地は美濃方面、時期は17世紀後葉と考えられる。
 21. 遺物番号437-1 白磁の皿。見込みにジャノメ釉が、また、重焼の痕がみられる。産地は肥前、時期は17世紀後半から18世紀前半頃。
 22. 遺物番号611 鉄・灰釉陶器の丸碗である。口径12.2cm、高さ6.5cm、産地は美濃？ 時期は17世紀四半期頃。
 23. 遺物番号554 青磁の輪花碗、篋罎りの草花文が描かれている。産地は肥前、時期は1630～1640年代に製産されたもの。
 24. 遺物番号558-1 青磁染付皿。見込に蛇目釉、剥釉に鉄泥縋重焼痕が見られる。
 25. 遺物番号280-1は、長石釉が施された志野織部皿、見込に輪ハゲ部分が見られる。産地は瀬戸・美濃、時期は連房Ⅱ期（1630-1670）
 26. 遺物番号589は、染付の碗。籬に草花の文様が描かれている。産地は肥前。年代は1680～1710年代に作られたもの。
 27. 遺物番号423 染付丸碗、銘文に『宣真年製』が書かれている。産地は肥前、年代は1670～1690年代。
 28. 遺物番号697 染付湯呑碗、文様は呉須絵で菊花散水裂文が描かれている。産地は肥前。年代は1780～1810年代の製作と考えられる。
 29. 遺物番号124 呉須絵染付の碗。文様は雲形文が描かれている。産地は肥前、時期は18世紀代。
 30. 遺物番号132 湯呑碗。京焼かまたは信楽焼か。口径9.3cm、高さ4.3cm。釉は御深井釉に見える色調。時代は18世紀代。
 31. 遺物番号571 陶器の折縁皿。やや青味のかかった長石釉が施されている。産地は美濃、年代は18世紀前半と考えられる。
 32. 遺物番号676-1 染付蓋付鉢の身。呉須絵の唐草文様。産地は肥前。時期18世紀前半～中葉と考えられる。
 33. 遺物番号483 御深井碗、産地は瀬戸・美濃、年代は連房Ⅳ期(1770～1840)年代。
 34. 遺物番号260-2 染付丸碗。菊火散じの水裂文。産地は肥前、時期は18世紀中葉から末葉。
 35. 遺物番号232-8 染付重物の蓋。呉須絵。産地肥前。時期は18世紀中葉から末葉と考えられる。
 36. 遺物番号7 染付碗、見込みに呉須絵の梅花文、腰部に蓮の連辨文、産地は肥前。年代は18世紀後半。
 37. 遺物番号473 呉須絵の染付皿。産地は瀬戸、時期は18世紀後葉。
 38. 遺物番号644-1 染付碗、丸文描。産地は肥前、時代は1820～1860年代。
 39. 遺物番号639-1 白磁染付の広東茶碗。産地は美濃。時期は19世紀前葉。
 40. 遺物番号565 高台付の播鉢、鉄釉と錆釉、産地は瀬戸・美濃。時代は19世紀前葉頃。
 41. 遺物番号715 土管。長さ84cm厚さ2cm。灰黒色、焼成良好、かき目痕あり。
 42. 遺物番号622-1 高台付呉須絵碗。産地は美濃か。時期は18世紀末～19世紀前葉頃。

43. 遺物番号131 灰釉の碗、産地不明。時期は19世紀末葉頃。
44. 遺物番号644-2 染付の端反碗、産地は瀬戸。時期は19世紀中葉。
45. 遺物番号190 灰釉の灯明皿、産地は美濃・信楽？ 時期は連房V期1840-1890年代。
46. 遺物番号691 染付湯呑碗、産地は肥前。阜文様、時期は1820-1860年代。
47. 遺物番号654-1 染付の皿。産地は瀬戸・美濃。時期は19世紀後半か。
48. 遺物番号470-5 染付型押の皿、産地は瀬戸・美濃。時期は20世紀前葉か。
49. 遺物番号465 染付の皿。径11.1cm、産地は瀬戸か。時期は20世紀中葉。
50. 遺物番号729 型押染付の湯呑茶碗、産地は瀬戸か。時期は20世紀中葉。
51. 遺物番号552 磁器の杯。「信濃錦」の銘が見られる。産地は瀬戸・美濃。時期は20世紀中葉頃。
52. 遺物番号235-4は、白磁の杯。産地は瀬戸・美濃。銘に「敷鳥の大和心を人とはば朝日ににほう山桜花」とある。時期は20世紀中葉頃。
53. 遺物番号278-6・303-2は、磁器の徳久利。コバルトの染付。産地は瀬戸・美濃。時期は20世紀中葉頃。
54. 遺物番号260-5 磁器の湯呑茶碗。「高遠閣」の銘が見られるので昭和11年頃ではないか。産地は瀬戸・美濃。
55. 遺物番号606-2・606-3 染付型押の磁器の皿。産地は美濃。時期は19世紀末。
56. 遺物番号746-1~7 染付型押の皿。産地は瀬戸・美濃。時期は20世紀中葉か。

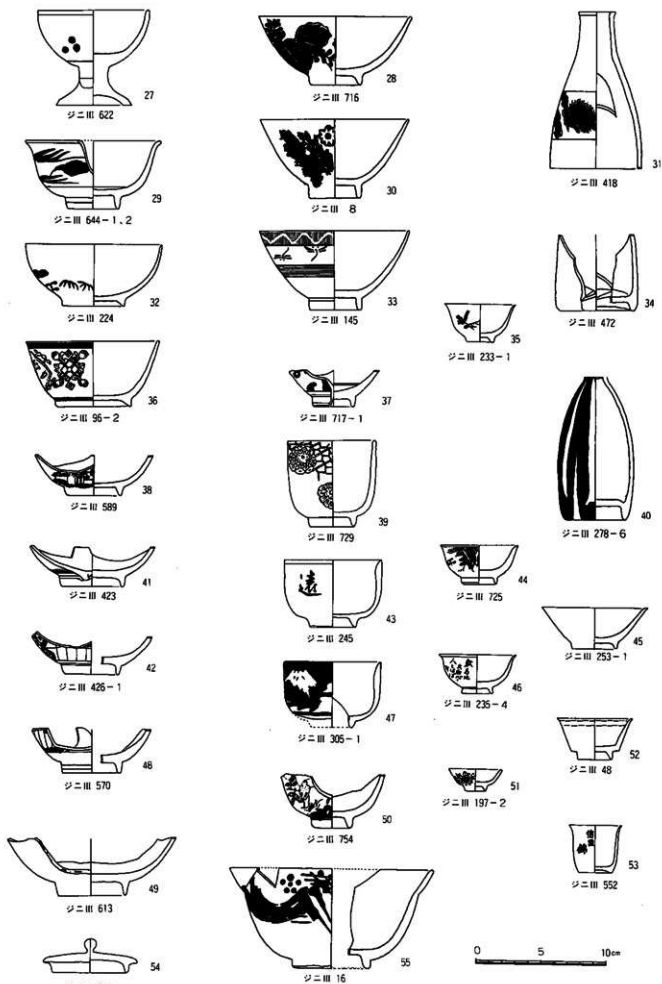
土管 土管の発見された位置は第一トレンチの終末地点に近い所。検出状態は現地表面下68cmに南北の方位で石垣の西側の位置に石垣と併行の形で発見された。土管の法量は、長さ83cm、厚さ1.7cmを測る。土管は継手の部分と本体の部分に分かれ、継手の部分は長さ14~15cm、厚さ1.5cmを測る。土管の色調は、灰黒色で分々によっては赤褐色に見られる。材質は瓦質である。胎土には、小長石及角閃石、普通輝石黒雲母などが含まれた粘土質で焼かれたものである。産地は在地と考えられる。制作年代は明治時代ではないか。
(友野良一)



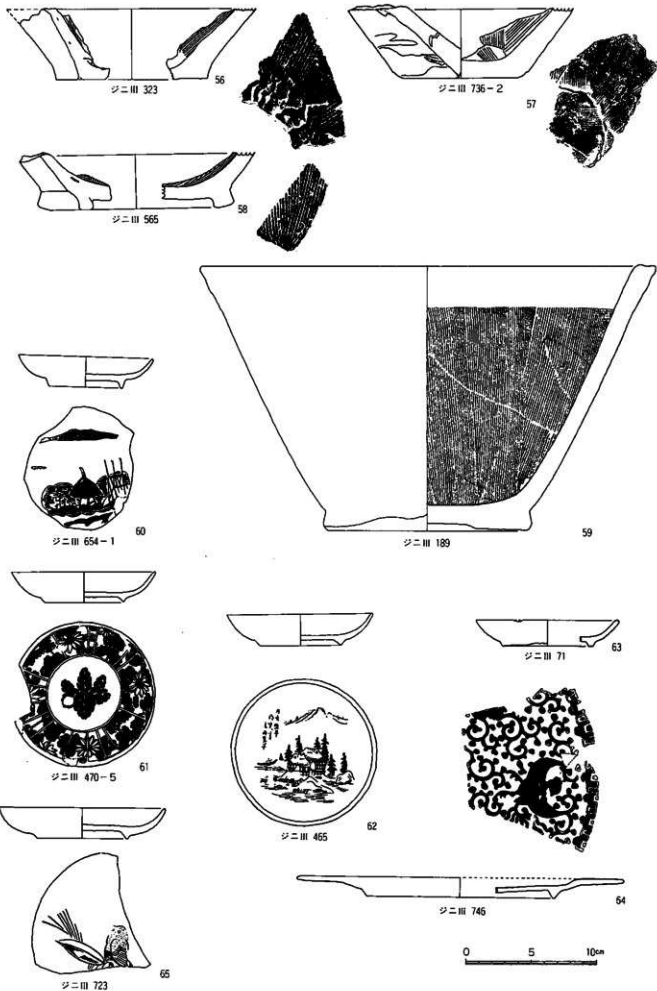
第29図 発掘調査出土遺物実測図(1)



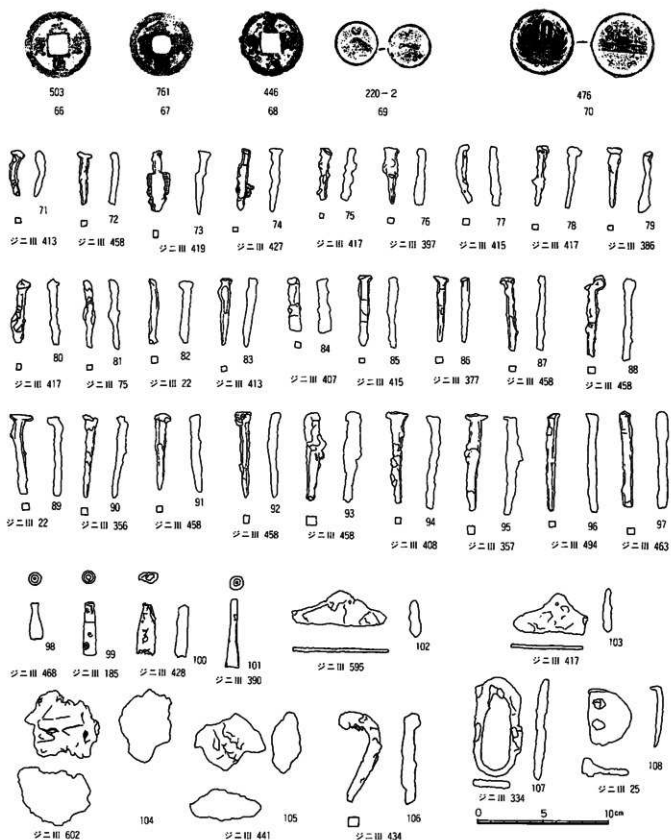
第30図 発掘調査出土遺物実測図(2)



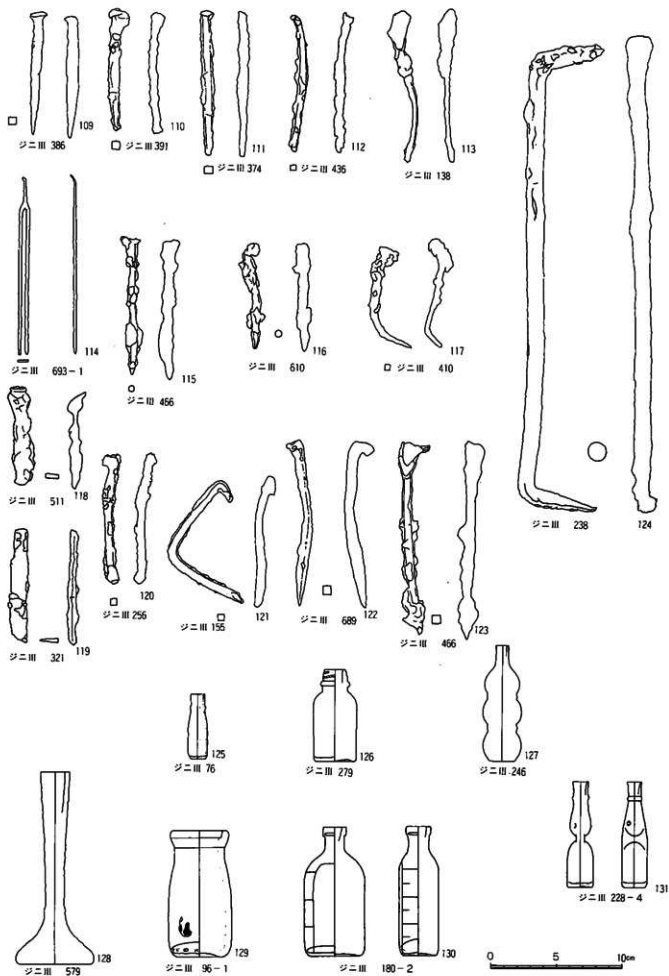
第32図 発掘調査出土遺物実測図(4)



第31図 発掘調査出土遺物実測図(3)



第33図 発掘調査出土遺物実測図(5)



第34図 発掘調査出土遺物実測図(6)

第5表 高遠城跡出土遺物一覧表

遺物番号	調査番号	出土場所	遺地	器種	時代	特徴・その他	高遠城跡内	遺物番号	調査番号	出土場所	産地	器種	時代	特徴・その他	高遠城跡内	
1		建1T	京	陶	陶	江	灰+鉄粒		56	建1G	瀬+美	陶	すり鉢	大	鉄	
2		"	瀬戸	骨磁	陶	明			57	建1T	不明	鉄	レール	昭		
3		"	肥前	白磁	丸陶	江(以降)	灰質		59	建1G	美濃	陶	不明	明~大	鉄	
4		"	瀬戸	磁	小皿	昭	桜印花の吹付		60	"	"	"	皿	大	鉄	
5		建2T	不明	鉄	角釘	明			61	"	瀬+美	白磁	不明	昭		
6		建6G	瀬戸	磁	陶	大	塗付色絵		62	"	不明	陶	"	不明		
7		建2T	肥前	白磁	不明	江18C(後)	灰質		63	"	瀬+美	磁	煎茶碗	江(末)	塗付+灰磁粒	
8		建6G	瀬+美	磁	茶碗	大	塗付赤絵	30	64	"	"	"	湯飲み	大		
9		"	瀬戸	"	陶	"	"		65	1-2	"	白磁	井鉢	大~昭		55
10		"	不明	骨磁	不明	不明			66	"	"	"	鉢	大		
11		建1T	"	土	"	"	窯焼き		67	"	美濃	陶	不明	明	鉄	
12		"	美濃	陶	"	大	灰+鉄粒		68	1-23	"	瀬+美	白磁	井鉢	大~昭	55
13		"	在池	辰	木版	不明			4	"	瀬戸	"	不明	昭(初)		
14		"	不明	鉄	丸釘	大			69	1	瀬+美	磁	湯飲み	大	塗付	
15		"	"	土	内耳鉢	瓶			2	"	美濃	"	不明	不明	"	
16	1	建4T	美濃	陶	不明	大			70	"	瀬戸	"	皿	昭		
2-3		"	瀬+美	白磁	井鉢	大~昭			71	建2G	瀬+美	"	"	大		63
17		"	不明	"	不明	昭	腹上に菊花紋様		72	"	不明	陶	不明	"	灰	
18		建3T	瀬+美	磁	煎茶碗	江(末)	塗付+灰磁粒		73	"	瀬+美	白磁	"	"		
19		建6G	不明	土	内耳鉢	瓶			74	建1G	"	磁	"	不明	塗付	
20		建1T	瀬戸	白磁	杯?	大			75	"	不明	鉄	角釘	江~明		81
21		建2T	不明	磁石	不明	不明			76	"	"	ガラス	ニツキビン	昭		125
22		"	"	鉄	角釘	江(末)~明		82部	77	"	"	鉄	丸釘	大		
23		建3T	美濃	白磁	煎茶碗	明			79	"	"	陶	不明	不明	灰	
24		"	不明	磁	不明	大			80	建2G	瀬+美	磁	陶	大	塗付	
25		"	"	鉄	"	明~大		108	81	"	不明	磁石	不明	不明		
26		建4T	"	"	丸釘	大			82	"	瀬+美	白磁	不明	昭	塗付	
27		建3T	美濃	陶	小皿	江	鉄		83	建1G	不明	ガラス	不明	大		
28		"	"	"	すり鉢	明	"		84	"	"	鉄	釘	不明		
29		"	不明	土	不明	不明			86	"	美濃	陶	火入れ?	大	灰+鉄	
30		"	"	鉄	角釘	明			87	"	不明	焼石	不明	不明		
31		"	美濃	陶	不明	大塚期	灰		88	"	美濃	陶	不明	明	灰	
32		"	不明	土	"	不明			89	"	不明	磁	"	大~昭	足込み湯碗	
33		"	"	"	"	"	灰 腹面に黒墨		90	建2G	"	ガラス	ビールビン	昭		
34		"	美濃	陶	笠形鉢	江	灰+緑		91	"	在池	瓦	不明	明(初)		
35		建4T	不明	土	不明	不明			92	建1G	美濃?	陶	火入れ?	大	灰+鉄	
36		建3T	"	陶	"	"	灰		93	1	"	不明	ガラス	不明	不明	
37		"	瀬戸	磁	陶	明	塗付+灰磁粒		2	"	美濃?	陶	茶碗	不明	灰	
38		"	瀬+美	骨磁	徳久利	江(末)			94	"	不明	鉄	丸釘	昭		
39		"	瀬戸	磁	煎茶碗	昭(初)	御飯屋押		95	"	"	"	"	大		
40		建6G	肥前	白磁	不明	江(以降)	灰質		96	1	建4T	"	ガラス	瓶	不明	129
41		建3T	在池	瓦	不明	明?			2	建1G	瀬+美	磁	陶	明	製押	36
42		建4T	不明	陶	不明	昭(初)	灰+塗付		97	"	"	陶	すり鉢	大~昭	鉄	
43		"	瀬+美	"	陶	明	灰		98	建2G	美濃	"	不明	大	砂引き輪	
44		建3T	不明	土	不明	平安(末)			99	1	建1G	瀬+美	磁	湯飲み	"	色絵
45	1	"	"	陶	"	不明	窯焼き		2	"	"	白磁	杯	昭		
2		"	在池	瓦	不明	明(初)			100	建2G	不明	ガラス	不明	不明		
46	1	"	"	"	"	"			101	建1G	"	鉄	丸釘	大		
2		"	不明	陶	不明	不明	窯焼き		102	1	"	瀬+美	骨磁	徳久利	江(末)	
3		"	"	"	"	"			103	2	"	"	磁	不明	明	塗付
47		"	美濃	磁	"	大			104	1	"	不明	鉄	丸釘	大	
48		"	瀬+美	"	磁	昭		52	2	"	"	白磁	皿	"		
49		建4T	瀬戸	"	"	江	塗付		105	建2G	美濃	陶	不明	"	白+灰	口縁に彩色帯
50		"	不明	骨磁	火入れ	明			106	"	"	"	陶	明	灰	
51		建3T	美濃	陶	不明	昭	鉄		107	"	肥前	"	盤皿(三角胎)	江(初)	鉄+灰	
52		"	瀬戸	磁	陶	明	塗付		108	1	建1G	美濃	磁	湯飲み	大	塗付
53	1	"	在池	瓦	不明	明(初)			2	"	瀬+美	"	不明	不明	不明	御飯屋押
2		"	"	"	"	"			109	"	"	陶	茶碗	大	灰	
54		"	瀬+美	磁	杯	大			111	建1T	不明	"	不明	不明	鉄粒	
55		建4T	"	白磁	不明	"			112	建1G	美濃	"	煎茶碗	江(初)	緑	

遺物番号	出土場所	産地	器種	時代	特徴・その他	実測図番号	遺物番号	出土場所	産地	器種	時代	特徴・その他	実測図番号			
204	3	建4G	瀬戸	白磁	不明	大		233	3	建7G	美濃	陶	不明	明～大	灰	
205				磁		昭(初)	込付	234	1		不明	磁		明(以降)		
206			不明	瓦	アルミ	ビン	蓋		2		不明	陶	不明	昭	磁+灰	
207			在池	瓦			明		3						灰	
208			瀬・美	磁	湯飲み	大		235	1	瀬・美	磁		大		込付	
	2		美濃	陶	不明		灰		2						大(木)	
	3					明			3		美濃		煎茶碗	明	込付+兵衛結	
	4		瀬・美	磁	湯飲み		兵衛結		4		瀬・美		杯	昭		46
209	1		美濃	陶	大人丸	大	鉄+灰		236	1・2	美濃	陶	すり鉢	江	鉄	
	2					不明	江(初)		237	1			蓋	大		
	3		瀬・美	磁	碗	明	灰+込付		2		不明		不明	明	灰	
	5					不明	大	込付	3		瀬戸	磁	皿	明(末)	惣草込付	
	6		瀬戸	煎茶碗	昭(初)		銅板型押		4		瀬・美		不明	大	込付	
	7		不明	白磁	不明				5		不明	陶		昭	緑	
	8		瀬・美		湯飲み	大		238		建4G		鉄	かたがひ	火		124
210			不明	陶	蓋		鉄		239	建7G	在池	瓦		明		
211	1	建3G	美濃	陶	皿		鉄結		240		瀬・美	磁	湯物	昭		54
	2		瀬・美	陶	不明		鉄+灰		241		美濃	陶	不明	江	鉄	
212	1	建4G	美濃	陶			特引き物		242	1	建3T	瀬戸	白磁	杯	大	
	2		不明	白磁		不明			2		瀬・美	磁	陶		込付	
	3		瀬戸	磁	杯	昭			243	建7G	瀬戸		湯飲み			
	4		瀬・美	白磁					244		瀬・美		不明		込付	
	5				蓋	大			245				湯飲み	昭和11年頃	陶「高道園」	43
213	1		不明	土	不明	不明	素焼き		246	1・2	不明	ガラス	ユツクシ	昭		127
214					鉢	戦		18	3			磁	湯物	不明	陶「日本陶」	
215			瀬・美	陶	不明	明	鉄結		247			鉄	鉄結	大		
216		建4G	不明	鉄	丸釘	大			248	1		陶	急眼+鉢		鉄	
217			瀬・美	磁	茶碗		込付赤絵	30	2				不明			
218	1・2			磁	皿	昭(初)	唐草紋・色絵		3			土	鉢			
219			瀬戸	湯飲み	昭				249	1	肥前	白磁	不明	江(以降)	兵衛	
220	1			白磁	杯				2		瀬・美	磁	徳久利	江(末)	手組込付	
	2			一鉄		昭和16年		69	3		美濃	白磁		明(以降)		
221	1	建3T	不明	鉄	丸釘	大			4		瀬・美		不明	江(末)		
	2		瀬・美	白磁	杯	昭			5		肥前		杯	明(以降)		
222		建4G	瀬戸	磁	碗		青花紋 茶色の成付		6		瀬戸	磁	煎茶碗	昭(初)	銅板型押	
223		建4T	瀬・美			明	押型	36	250		瀬・美		杯	大	込付	35
224	1・2・3	建5G					込付	32	251		不明	土	鉢(陶)	不明		
225		建1T	美濃	陶	湯物	大	鉄		252	1	美濃	陶	大	鉄		21
226		建4G		陶	不明	明	灰 込付		2		不明		蓋	大		
227	1	建4G	瀬・美		茶碗	大	込付赤絵	30	3							
	2		不明		不明	不明	鉄		4							
228	1	建7G	瀬・美		陶	明	灰		5		美濃		不明	明～大		
	2		美濃			不明	灰		6		瀬・美		すり鉢	大～昭		
	3		不明	ガラス		不明			7		不明	磁	不明	明～大		
	4				ユツクシ	昭			8		美濃	陶	すり鉢	明		
229	1・2・3		瀬・美	磁	不明				9		瀬・美		碗	灰		
230	1			骨磁	徳久利	江(末)			10		不明	土	蓋	火		
	2		不明	陶	徳久利+しち	昭			11		在池	瓦	明			
	5				不明	明～大	鉄		253	1	瀬・美	磁	杯	大～昭		45
231	1		瀬・美	白磁	陶	火			2				不明	不明	込付	白磁部に鉄線
	2		不明			明			3		美濃	陶		江	灰	
232	1・2		美濃	磁	不明	大			254	1				江	長	
	3					明	込付		2		不明	磁		大	込付	
	4		瀬・美		杯	大	口縁に金泥ぬり		3		瀬・美		不明			
	5		瀬戸	白磁					255		美濃	陶	蓋	明～大	鉄	
	6		瀬・美		不明	昭			256		不明	鉄	かたがひ			120
	7			磁	煎茶碗	大	込付		257		建1G		陶	不明		鉄
	8		肥前	白磁	湯物の深	江(中)18C	兵衛		258			土師	皿	平安(末)	赤銅産	
233	1		瀬・美	磁	杯	大	込付	35	260	1	建7G	美濃	陶	しち七	昭	
	2		美濃	白磁	徳久利	昭(初)			2		肥前	白磁	丸碗	江18C	兵衛	

遺物番号	出土場所	産地	器種	時代	特徴・その他	資料館番号	遺物番号	出土場所	産地	器種	時代	特徴・その他	資料館番号
354	建3G	不明	陶	不明	不明	灰	403	建2G	不明	土	不明	不明	
355	"	美濃	"	壺	大富期	鉄	404	建3G	"	陶	甗	灰	
356	"	不明	鉄	角釘	江(末)~明		90	405	建3G	瀬・美	"	すり鉢	鉄
357	建1T	"	"	"	"		95	406	建2G	"	"	丸皿	灰
358	建2G	"	登	不明			407	建1T	不明	鉄	角釘	不明	84
359	建2T	不明	陶	皿	明	内面に底部特形に筋線	408	建2G	"	"	"	江(末)~明	94
360	建3T	瀬・美	"	すり鉢	大	鉄	409	"	"	土	不明	明~大	窯焼き
361	"	不明	"	不明	"	"	410	建5G	"	鉄	角釘	江(末)~明	117
362	建1G	"	土	鉢	不明	窯焼き	411	建2G	"	土	不明	平安	
363	建3G	"	"	内耳鉢	戦		412	"	美濃	陶	天目茶碗	大富期	鉄
365	1	"	美濃	陶	皿	江	長	413	"	不明	鉄	角釘	明
2	"	"	"	"	大富期	灰	重ね焼き	414	建1T	"	"	九釘	大
366	1	"	"	"	不明	"	灰	415	建2G	"	"	角釘	明~大
2	"	"	"	"	明~大	"	"	416	建1T	"	"	不明	大
3	"	"	"	"	杯	江(末)	灰	417	"	"	鉄	鉄片と角釘	明
367	"	在地	木炭	不明				418	建3G	瀬・戸	磁	徳久利	大
368	"	美濃	陶	皿	明	灰		419	建2G	不明	鉄	角釘	明
369	"	瀬・美	"	すり鉢	大富期	鉄		421	"	常滑	陶	甗	江
370	建7G	美濃	"	"	大	"	21	422	"	美濃	"	不明	大
371	建3G	不明	鉄	角釘	明			423	"	肥前	白磁	丸碗	江
372	建2G	"	"	"	不明			424	"	美濃	陶	天目茶碗	大富期
373	"	美濃	磁	碗	大			425	1・2	"	"	皿	江(初)
374	建1T	不明	鉄	角釘	江(末)~明		111	426	1	"	瀬・美	磁	碗
375	建3G	"	土	鉢	戦		18	2	"	"	"	不明	明(初)
376	"	瀬・美	磁	不明	明(初)	込付		3	"	不明	白磁	"	大
377	"	不明	鉄	角釘	江(末)~明		86	427	"	"	鉄	角釘	明
378	"	"	土	不明	不明	窯焼き		428	"	"	銅	キセル	明
379	"	美濃	磁	"	戦	底部未切底		429	"	"	土	内耳鉢	戦
380	1	建3G	"	陶	"	明	長	430	"	"	骨	"	不明
2	"	瀬・美	"	丸皿	大富期	灰		431	"	美濃	陶	皿	江
381	"	不明	ガラス	"	大			432	"	"	天目茶碗	大富期	大
382	"	"	鉄	角釘	明			433	"	不明	土	内耳鉢	戦
383	1	建2G	"	陶	不明	大	灰	434	"	"	鉄	角釘	江(末)
2	"	美濃	"	杯	江(末)	"		435	"	常滑	陶	甗	大富期
384	建3G	不明	鉄	鉄片	不明			436	"	不明	鉄	角釘	江(末)
385	建2G	"	"	角釘	明			437	1	"	肥前	白磁	丸碗
386	"	"	"	"	江(末)~明		70	2	"	瀬・戸	菅巻	碗	明
387	建3G	"	土	内耳鉢	戦		438	"	不明	土	内耳鉢	戦	
388	建2G	"	陶	すり鉢	江		439	"	"	"	"	"	
389	"	"	鉄	角釘	明		440	"	"	"	"	"	
390	"	"	銅	キセル	江(末)~明	吹い口	101	441	"	"	鉄	鉄甕	不明
391	"	"	鉄	角釘	"		110	442	"	瀬・美	磁	煎茶碗	明(中)
392	"	"	"	九釘	大		443	"	美濃	陶	皿	江(初)	鉄
393	"	"	土	内耳鉢	戦		445	建4T	"	不明	"	"	大
394	建1T	美濃	陶	甗	"	灰	重ね焼き	446	建6G	中国	古鏡	定(1085年)	元吉通寶
395	建2G	不明	土	内耳鉢	"			447	"	瀬・戸	磁	湯飲み	明
396	1・2	"	美濃	陶	皿	江(初)	鉄	輪ハゲ	20	448	建4T	瀬・美	"
397	"	不明	鉄	角釘	明		76	449	1	"	不明	陶	不明
398	1	建3G	在地	瓦	明?			2	"	美濃	"	陶	鉄
2・3	"	"	"	"	明		450	"	"	"	皿	明	灰
4~6	"	"	"	"	明?		451	"	瀬・戸	磁	"	甗	唐草紋型押
7	"	"	"	"	明(初)		452	"	瀬・美	"	陶	"	込付
8~9	"	"	"	"	明?		453	建6G	中国	菅巻	不明	不明	
10~11	"	"	"	"	明(初)		454	"	不明	土	内耳鉢	戦	
12~16	"	"	"	"	明?		455	建1T	美濃	陶	皿	明	灰
17	"	"	"	"	明(初)		456	建5G	瀬・美	磁	陶	"	込付
399	建2G	美濃	陶	すり鉢	江	鉄		457	"	美濃	陶	不明	大
400	建1T	不明	土	内耳鉢	戦		458	建1T	不明	鉄	角釘	江~明	711
401	建2G	"	"	"	底部		459	"	美濃	陶	陶	戦	鉄
402	建1T	"	"	"	"		460	建1G	瀬・美	白磁	青鉢	大~明	

遺物番号	出土場所	産地	器種	時代	特徴・その他	実測寸法	遺物番号	出土場所	産地	器種	時代	特徴・その他	実測寸法
461	遺1G	瀬・美	白磁 磁	大			512	1	菅T	瀬・美	磁 扇飲み	明(末)	込付
462	1	在 地	瓦	明			2	在 地	不明	陶 磁	明	鉄	
	2	瀬・戸	磁 茶碗	大			513	在 地	焼石		不明		
463	不明	鉄 角釘	明			97	514	不明	磁石				
464	不明	土 不明	不明				515	不明	土 内耳鉢	磁			
465	瀬・戸	磁 磁	大	込付		62	516	美 遺	陶 すり鉢	明	鉄		
466	不明	鉄 丸釘やすめい	明			118 125	517	在 地	三峰川産石		不明		
467	瀬・美	磁 煎茶碗	江戸末	角須絵			518	瀬・戸	白磁 不明				
468	不明	銅 キセル	江戸一明	吹い口		98	519	不明	青磁 碗	江			
469	美 遺	磁 不明	大一昭				520	瀬・美	磁 不明	大	込付		
470	1-4	不明	陶 釜めしの壺	期		23	521	不明	不明		昭(初)		
	5	瀬・美	磁 皿	明一六	込付 型押	61	522	不明	陶 不明	大	灰		
471	不明	不明	土 内耳鉢	磁			523	瀬・美	磁 不明		込付		
472	遺1G	瀬・美	白磁 徳久利	大		34	524	不明	陶 不明		灰+鉄		
473	瀬・戸	陶 磁	江18C(後)	込付			525	不明	石		不明		
475	1	瀬・美	不明	すり鉢	大	鉄	526	美 遺	陶 徳久利	江	灰		
	2	美 遺	不明	天目茶碗	磁		527	瀬・戸	磁 徳久利	大		31	
	3	不明	磁 杯	昭	口縁部に金泥塗り		528	1-3	不明	陶 碗		灰 込付	
476	不明	不明	10円玉	昭和33年		70	529	瀬・戸	陶 水皿		灰+緑泥し		
477	1	不明	磁 不明	大 型押			530	1	不明	石	不明		
	2	美 遺	陶 不明	明	長		2	美 遺	白磁 不明	大	足込みに色絵		
478	瀬・美	不明	不明	すり鉢	大一昭	鉄	3	不明	陶 不明	不明	灰		
479	不明	不明	不明	不明	明	込付	4	美 遺	不明	碗	明		
480	1	美 遺	陶 不明	江	鉄 腰に動物	24	5	瀬・戸	磁 不明	大			
	2	不明	不明	志野皿	長		531	1	不明	白磁	不明		
481	1	不明	不明	茶碗	明		2	不明	不明	不明	大		
	2	不明	不明	不明	不明	鉄	532	1	不明	土	不明		
	3	瀬・美	不明	茶碗	大	灰	2	不明	不明	不明	不明		
483	不明	不明	不明	御深井戸	江	不明	12	3	不明	不明	不明		
484	不明	美 遺	不明	不明	不明		533	1	瀬・美	白磁	大		
485	不明	不明	不明	鉄 鉄舟	不明		2	不明	不明	不明	不明		
486	遺1G	瀬・戸	磁 湯飲み	昭(初)	銅板型押		3	瀬・戸	不明	皿		込付	
487	不明	瀬・美	陶 すり鉢	明	鉄		534	瀬・美	陶 陶	明	灰		
488	遺1G	美 遺	不明	不明			535	1	不明	不明	大	鉄+灰	
489	不明	不明	不明	不明	大	鉄+銅	2	在 地	三峰川産石		不明		
490	遺1G	不明	不明	茶碗	明	鉄	536	美 遺	陶 陶	明	灰		
491	1	遺1G	不明	不明	不明	灰	537	不明	不明	不明	不明	口蓋に金泥	
	2	遺1G	不明	不明	不明	不明	538	瀬・戸	白磁 磁	大	口蓋に金泥		
492	遺1G	不明	不明	重物	大	鉄	539	美 遺	陶 不明	明	鉄		
493	遺1G	不明	不明	不明	不明	灰	540	不明	不明	不明	不明		
494	遺1G	不明	不明	角釘	明		96	541	瀬・美	不明	大	灰	
497	遺3G	不明	不明	ガラス	ビン	昭	産地	542	不明	磁石	不明	不明	
498	遺1T	美 遺	陶 磁	大室前	灰		543	瀬・美	陶 不明	大	鉄		
499	1	遺3G	在 地	瓦	不明?		544	不明	不明	不明	不明	不明	
	2	不明	不明	不明	不明(初)		545	美 遺	不明	不明	不明	不明	
	3-11	不明	不明	不明	不明?		546	1	不明	磁	タイル	大	
	12	不明	不明	不明	不明	込付	2	不明	不明	不明	不明	不明	
500	遺1T	瀬・美	不明	不明	不明	不明	547	瀬・美	不明	不明	不明	不明	
501	不明	不明	不明	不明	不明	不明	548	不明	不明	不明	不明	不明	
502	1	不明	不明	不明	不明	不明	549	美 遺	白磁	湯茶碗	江	形吹き	
	3	不明	不明	不明	不明	不明	550	1	不明	土	皿	平安	
503	不明	中 国	古銭	宋	元費通貨	66	2	不明	不明	不明	不明	不明	
504	不明	不明	不明	不明	不明	不明	551	瀬・美	不明	不明	不明	不明	
505	遺3G	中 国	磁	不明	不明	不明	552	不明	不明	不明	不明	不明	
506	2	菅T	瀬・戸	青磁	陶	明	553	瀬・戸	不明	不明	不明	不明	
507	不明	美 遺	陶 鉢	戦	鉄		554	不明	青磁	輪花陶	(1685-1686)	鹿野り紋様	
508	不明	不明	不明	不明	不明	不明	555	瀬・美	白磁	不明	不明	不明	
509	遺1G	美 遺	陶 不明	大政期	灰		556	美 遺	陶 茶碗	明	長		
510	遺1T	瀬・美	磁 湯飲み	昭	青地に茶毛の赤磁込付		557	不明	不明	不明	不明	不明	
511	不明	不明	不明	不明	不明	不明	118	558	1	不明	不明	不明	

ま と め

本報告書は、平成6年度に実施した史跡高遠城跡二ノ丸内の、便所建設に伴う埋蔵文化財の緊急発掘調査報告書である。この調査は、高遠城内（高遠町大字東高遠2286番地）のうち二ノ丸内に水洗便所を建設し、汚水管を埋設したことから、史跡高遠城跡の現状変更申請（便所改修等）の許可の条件である。便所建設予定地の部分はもちろん、汚水管の埋設予定地の記録保存も併せて行った。今回の発掘調査を通じて知り得た二、三の問題点を記し、まとめとしたい。

1) 便所建設の予定地

調査の面積は70.1㎡を対象に実施することとしたが、遺構、遺物の確認のために発掘場所によって、一部変更拡張を行った場所もあった。また、断面の確認の必要から、中央に東西、南北に二本に十字のベルトを設け調査を行った。調査の記録は遺構では第12、13、16図に、遺物は第17、19図に、また、出土遺物の番号については、報告書には記号のみにして表記した。遺物の出土状態は、平面図と断面図に記した。

調査の方法としては、設定された調査トレンチを単位として進められた。調査は出来る限り出土遺構、遺物の水平的な存在による年代を確認するため、水平に掘り下げる方法によった。

発見された遺構としては、地表下15cmの面から発見された。このことは、この場所に昭和の前半頃民家があったので、その基礎に使用された施設であったようである。また、民家が撤去された後と考えられるがゴミ捨て場として使われていたらしく、新しいゴミが多く発見された。

調査された遺構は第16図に示してあるように、出土したピット状の遺構は配置的な面からとらえても、建造物に関係ある遺構と断定し得ないピット群であった。また、この場が北側が高く南側が低い地形であることから、段差を認めながら造られた遺構とは到底考えられない遺構の存在であった。今回の調査では現在のところ、総じて直接城郭にかかわる遺構とするに至らなかった。

出土遺物については、古いところではNa44、258、290など平安時代の土師器と考えられる。また今回の調査では須恵器は見当たらなかった。次に鎌倉時代12世紀代としては、Na261の中国竜泉窯製の青磁碗が検出された。竜泉窯の青磁は中川村の大草城から発見されている。大草城は鎌倉時代より南北朝時代の城郭として、伊那地方では重要な城の一つである。今回の調査では一片であったが、高遠城の研究の上では重要な位置をしめる遺物である。また、その外に中国宋時代の「元豊通寶」No446、503、761の古銭が発見された。現在のところ、この古銭が最古の資料である。室町時代の遺物では、瀬戸・美濃産の灰釉皿大塚期（15世紀）Na273などがあり、鉄釉天目茶碗ではNa202-2や、すり鉢、碗などが多く出土した。

戦国・桃山時代としては、Na158、286、305-2、319、325、345-2、348、363、400、401、402、429、438、454、471、515など多くの内耳鍋の破片が出土した。伊那地方では、この時代の遺物としては内耳鍋が多く発見されている。その他灰釉の丸皿、鉄釉の皿、碗、鉢など、瀬戸・美濃・常滑産などの陶磁器が出土した。特に瀬戸・美濃産の天目茶碗は注目される資料である。

江戸時代では、大塚期から登窯に移行した時期の陶磁器の遺物である。江戸初期ではNa106肥前盤皿で三島山産、Na112は瀬戸、美濃産の折縁皿、Na280-1、396志野織部焼。美濃産鉄釉皿のNa425、443など、一般的には江戸時代の遺物が半数をしめている。また、江戸時代末期の陶器類も認められた。その外明治・大正・昭和の遺物もかなりの数検出されている。便所建設予定地では明治以降に民家が存在した関係も

あつてか、遺物の種類は平安時代から鎌倉・室町・戦国・桃山・江戸・明治・大正・昭和に至る時代の遺物が500余点検出された。

2) 管路第1トレンチ

便所建設予定地から北西の方向に基点より35m地点までの区間を第1トレンチとし調査を行った。この地域は江戸時代に西洋糞古場、厩、米蔵などが所在した場所と伝えられている場所である。第1～第3集石は近年の暗渠排水の集石である。第4～第8集石は15m～25m程の区間の落ち込みの部分に発見された遺構である。この遺構の両側部分地表下1m程の所に径が50cm程の平盤石4個が並んだ形で発見された。この平盤石の上面から17世紀代の鉄軸の碗が検出され、これらの碗から江戸時代の高遠城の生活の状況を知る注目すべき遺物となった。そのほか江戸時代前期の遺物と考えられるものも発見されている。第4ピット付近には石垣の根元部分と考えられる石が並べられた状態で発見されたが、調査の範囲が狭いため付近を調べることが出来なかった。しかし、古い時期の石垣の一部ではないかとして、今回はそのまま保存した。32m地点の第5ピットでは、灰黒色の土管が南北の方向に埋められているのを発見した。この土管は両方向に続いているらしいが未確認である。今回は土管一本分を取り上げ、そのあとに同径のヒューム管を埋め保存を図った。この土管は明治時代に製造されたものらしく、現在研究中である。

3) 管路第2トレンチ

本トレンチは第1トレンチ終点から、高遠閣前の92m地点までの区間である。この区間、二ノ丸部分の地形には、いろいろの変化があったようである。今回の調査に当たっては、これらの事情を十分に考慮に入れ調査は進められた。また、文化庁及び県文化課との打ち合わせにより、現状維持の立場から、すでに埋設されているN T Tの電話線管路を確かめて、それに沿って設ける様に調査は行われた。第1トレンチの起点より12m～62m間にはかなり深い落ち込みがあることが確認された。この落ち込みの地層は、まだかなり深く落ち込み、層を調べて見ると、かく乱層であることが解った。高遠城は保科氏以降は城郭そのものの構造にはあまり大きな変化はなかったとも言われている。武田氏が城郭を構えた頃とも考えられる。また、高遠城の古図を見ると、それ以降異なる点は、笹郭が城郭の一部として機能していないこと、二ノ丸と本丸との間が土橋で結ばれており、南郭が現在と比べ東側に大きく伸びて、本丸入口付近から東の方向へ空堀が二ノ丸を貫いている。この空堀の跡が今回の12m付近から始まる深い落ち込みの部分ではないかとの考え方もできる。12m～30m地点の間は今回十分な調査が出来なかったため、この問題については結論は出せなかった。遺物は落ち込みの深い箇所からは平安時代の土師器や大窩期の天目茶碗の破片が出土した。また、浅い層からは、江戸時代末から明治・大正・昭和の年代の新しい遺物が発見されている。

4) 管路第3トレンチ

この箇所では高遠閣前からの水道管の布設箇所に沿って設けられた。この区間には25m～33mに落ち込みが認められたが、遺物の状況から江戸時代に関係した遺構とは思われない。遺物は平安時代頃の土器の皿、大窩期・戦国・江戸・明治・大正・昭和の物などが出土している。以上今回の調査の重要と思われる点を記し、まとめとしたい。

(友野良一)

あとがき

『史跡 高遠城跡』二ノ丸便所建設事業②に対する、緊急発掘調査の経過並びに成果につきましては、本文中に記載したとおりであります。

遺構の保護を考え、保存処置を行なわながら、工事を無事終了することができましたことは、文化庁の伊藤調査官をはじめ、県教育委員会など関係機関のご理解とご協力の賜物であると感謝申し上げますとともに、この報告書を発刊するにあたり、調査員の先生方には、多忙なところを遠くからご足労、ご尽力いただき、調査から報告書の執筆まで、短い期間にまとめることができました。ここに厚くお礼申し上げます。また、調査団長の友野先生には、陣頭指揮の傍ら休憩時間を利用するなどして、作業員の皆さんと進んで学習会をもつていただき、深い研究の中からにじみ出る一言ひと言から、歴史調査の大切さや埋蔵文化財の貴重さを教えていただきました。

期間中数々のご苦勞をおかけしたにも関わらず、積極的に作業に参加し、興味を持って取り組んでいただきました発掘作業員の皆さんや、測量・重機に関わっていただいたオペレーターの皆さんに、心から感謝申し上げます。

高遠町教育委員会

教育次長 田中 幸人

【参考文献】

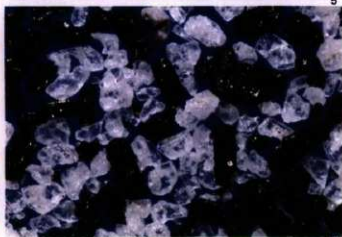
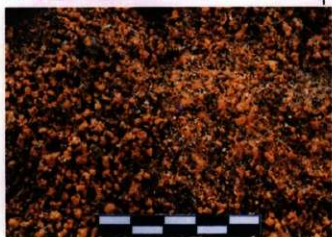
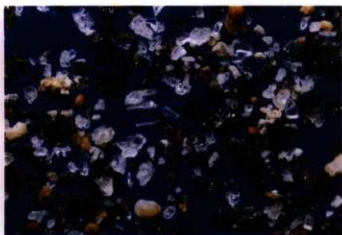
高遠町誌刊行会	1979	「高遠町誌（下巻 自然・現代・民俗編）」
〃	1983	「高遠町誌（上巻 歴史編）」
瀬戸市歴史民俗資料館	1984	「研究紀要Ⅲ」
〃	1985	「研究紀要Ⅳ」
〃	1986	「研究紀要Ⅴ」
〃	1987	「研究紀要Ⅵ」
高遠町教育委員会	1988	「高遠城跡二ノ丸門発掘調査報告書」
〃	1988	「史跡高遠城跡 保存管理計画策定報告書」
瀬戸市歴史民俗資料館	1988	「研究紀要Ⅶ」
高遠町教育委員会	1990	「原勝間遺跡」
〃	1992	「史跡高遠城跡二ノ丸Ⅱ」
〃	1993	「金井原遺跡」
多治見市教育委員会	1993	「美濃窯の焼物」

写真図版

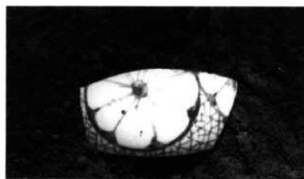
高遠城跡の地質関係写真

図版 1

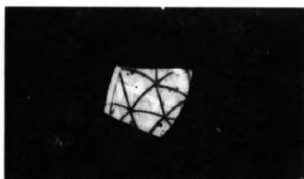
1. 御岳三岳テフラ。二ノ丸の地面の下、3～4 mの場所に約20cmの厚さで堆積している。粒径は0.5～2 cm、御嶽火山から約5.7万年前に飛来した赤褐色のスコリアである。(スケールの1目盛りは1 cm、2・3も同じ)
2. 御岳伊那テフラ。二ノ丸の地面の下、5～6 mの場所に約40cmの厚さで堆積している。粒径は0.2～0.5 cm、御嶽火山から7.3～7.5万年前に飛来した橙色の軽石である。
3. 御岳第1テフラ。二ノ丸の地面の下、7～9 mの場所に約2 mの厚さで堆積している。粒径は1～5 cm、御嶽火山からおよそ10万年前に飛来した黄白色の軽石である。
4. 高遠城の地下の岩盤。高遠城はこのような黒雲母片麻岩の基盤岩で支えられている。三峰川の両岸によく露出している。
5. 第1図①地点で、地表から約60 cmの深さの赤土に含まれる鉱物。御嶽テフラのしそ輝石などに、九州姦良カルテラから飛来した姦良Tnテフラの火山ガラスが混じる。(写真の横の長さは、実物では約7 mmである。以下同じ)
6. 御岳伊那テフラに含まれる鉱物。長柱状・黒褐色はしそ輝石、粒状・黒色は磁鉄鉱、白～透明は長石である。
7. 御岳第1テフラに含まれる鉱物。黒色・長柱状は角閃石、黒色・粒状は磁鉄鉱、六角形・板状は黒雲母、白色・柱状で一部曲がっているものはパーミキュライト、白～透明は長石と火山ガラスである。
8. 御岳第1テフラ層の下の古土壌中の鉱物～砂粒。石英粒など岩石の風化岩片であり、火山起源の鉱物は見られない。



図版 2



18



39



423



465



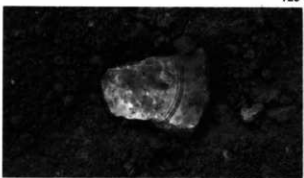
570



729



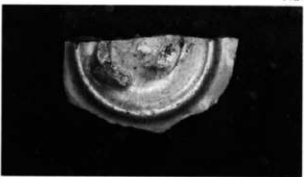
107



112



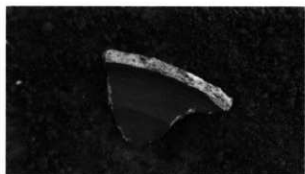
130



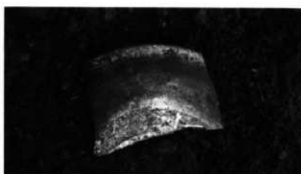
322

発掘調査遺物出土状況 ① ※番号は遺物番号

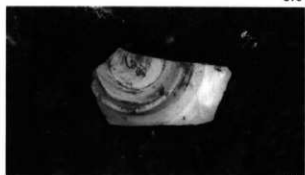
図版 3



370



443



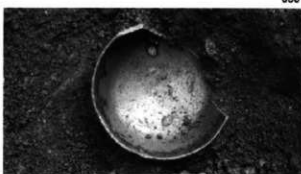
562



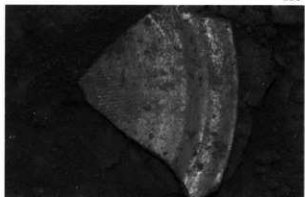
636



598



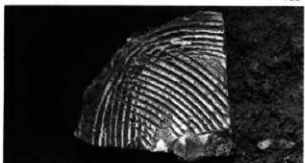
611



183



323



569



688

発掘調査遺物出土状況 ② ※番号は遺物番号

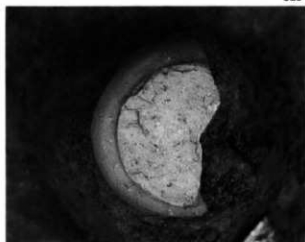
図版 4



325



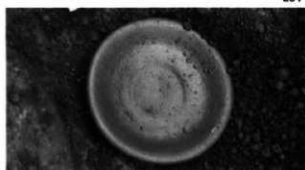
573



294



315



604-1



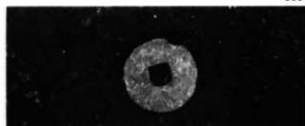
579



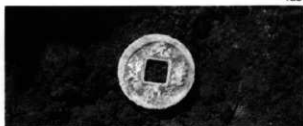
390



428



446



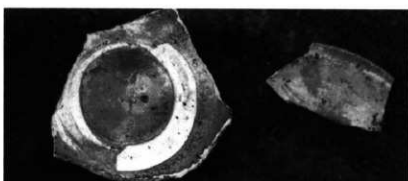
503

発掘調査遺物出土状況 ③ ※番号は遺物番号

図版 5



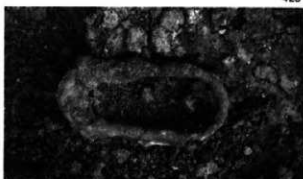
220-2



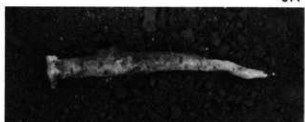
425



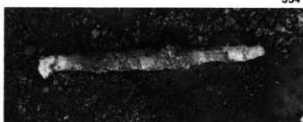
514



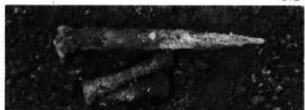
334



372



374



386



407



715

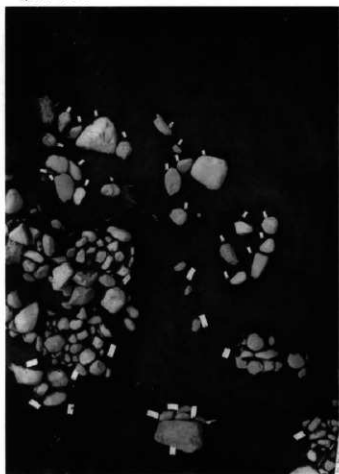
発掘調査遺物出土状況 ④ ※番号は遺物番号



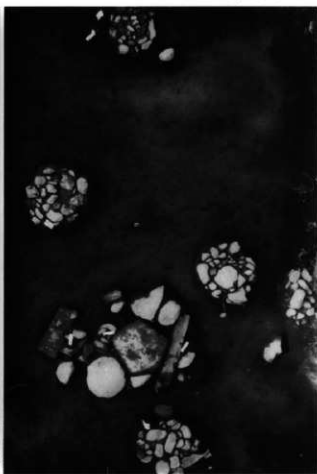
第1グリッド



第4グリッド



第2グリッド



第3グリッド

便所建設予定地第1レベル平面（中央のベルト部はカットしてあります）



便所建設予定地



管路第1トレンチ



管路第2トレンチ



管路第3トレンチ

調査地発掘調査前の状況



便所建設予定地調査状況



県文化課と調査打ち合わせ (第1レベル)



調査状況



調査状況

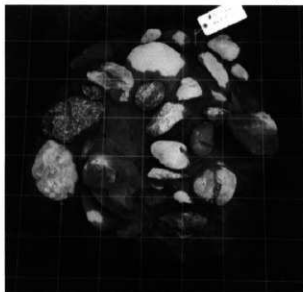


遺物洗浄作業



集石No.9と遺物出土状況 (第1レベル)

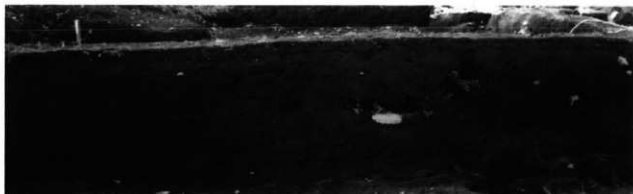
便所建設予定地調査状況



集石No.8 (第1レベル)



集石No.21と遺物出土状況 (ベルト部第1レベル)



ベルト断面調査状況 東西ベルトの西側部分 (南向断面)



ベルト断面調査状況 東西ベルトの東側部分 (南向断面)



ベルト断面調査状況 南北ベルト (西向断面)

便所建設予定地調査状況



便所建設予定地最終レベルの状況（上：東側から 下：北側から撮影）



管路第1トレンチ調査状況



最終レベル (建設予定地側から撮影)



便所建設予定地と管路第1トレンチ



トレンチ西側出土の配石No.1と土管(シニIII 715)

管路第1トレンチ調査状況



最終レベル
(第2トレンチ側から撮影)



管路第3トレンチ調査状況



第3トレンチ最終レベル（西側から高連間へ向かう）



第2トレンチ試掘坑A地区（10m地点）



第2トレンチ試掘坑B地区（30m地点・配石No.2）



第2トレンチ試掘坑C地区（60m地点）

管路トレンチ調査状況



第2トレンチ最終レベル

（上：第1トレンチ側から撮影
下：第3トレンチ側から撮影）

図版 13



管3-19ビット 管3-18ビット 管3-10黒石 管3-17ビット

管3-20ビット

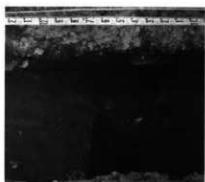
管路第3トレンチ調査状況



調査状況



管2-14ビット



管2-13ビット



51m地点断面



57m地点断面

管路第2トレンチ調査状況



17.5m地点断面



21.5m地点断面

管路第2トレンチ調査状況



管路第1トレンチ配石No.1
(砂入れ後污水管は遺構上を通す)



管路第2トレンチ (NTT管に沿って污水管埋設)



管路第2トレンチ (トンネル掘りにてピットを保存する)
污水管埋設工事遺構保存状況



東側に石垣の残る二ノ丸（高遠閣前から南側を望む 昭和5年撮影）

矢島 昭氏より借用

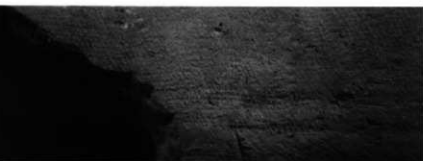


現在の二ノ丸（同上場所を撮影）



文化11年の銘が彫り込まれた土管

A : 土管内部の状況



B : 全体の様子

C : 布目痕を残す土管表面

高遠町郷土館蔵

図版 16



シニⅢ 261 1



シニⅢ 736-2 5



シニⅢ 706-1 2



シニⅢ 323 6



シニⅢ 603 3



シニⅢ 322 7



シニⅢ 424 4



シニⅢ 307 8

1. 青磁碗 2. 平碗 3. 壺口縁部 4. 天目茶碗 5. 搦鉢
6. 搦鉢 7. 丸皿 8. 丸皿

発掘調査出土遺物 ①

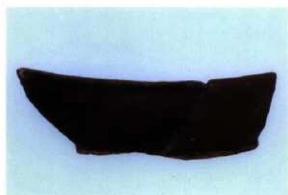
図版 17



ジニ皿 429 9



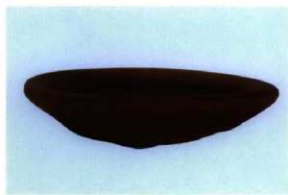
ジニ皿 704-1 13



ジニ皿 214 10



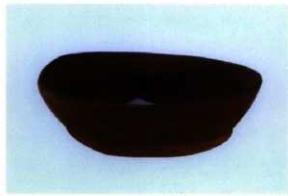
ジニ皿 695-1 14



ジニ皿 604-1 11



ジニ皿 301 16



ジニ皿 294 12



ジニ皿 605 16

9. 内耳鍋の耳 10. 土師質の平鉢 11. 土師質の皿
 12. 土師質の薬焼の皿 13. 白磁の皿 14. 折縁皿
 15. 天目茶碗 16. 灰釉碗

発掘調査出土遺物 ②

図版 18



ジニ皿 266 17



ジニ皿 437-1 21



ジニ皿 112 18



ジニ皿 611 22



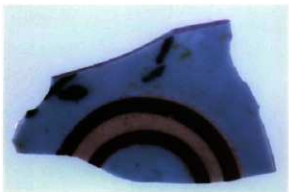
ジニ皿 107 19



ジニ皿 554 23



ジニ皿 598 20



ジニ皿 558-1 24

17. 志野皿 18. 折縁皿 19. 盤皿 20. 鉄輪の碗
 21. 白磁の皿 22. 鉄輪の丸碗 23. 青磁の輪花碗
 24. 青磁染付皿

発掘調査出土遺物 ③

図版 19



ジニⅢ 280-1

25



ジニⅢ 124

29



ジニⅢ 589

26



ジニⅢ 132

30



ジニⅢ 423

27



ジニⅢ 571

31



ジニⅢ 697

28



ジニⅢ 676-1

32

25. 志野織部皿 26. 染付碗 27. 染付丸碗
 28. 染付湯香碗 29. 染付碗 30. 湯香碗 31. 折縁皿
 32. 染付蓋付鉢の身

発掘調査出土遺物 ④

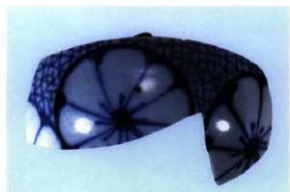
図版 20



ジニⅢ 483 33



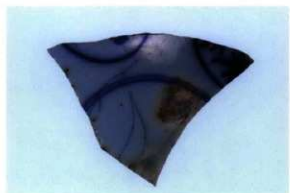
ジニⅢ 473 37



ジニⅢ 260-2 34



ジニⅢ 644-1 38



ジニⅢ 232-8 35



ジニⅢ 639-1 39



ジニⅢ 7 36



ジニⅢ 565 40

33. 御深井碗 34. 染付丸碗 35. 染付葺物の蓋 36. 染付碗
37. 染付皿 38. 染付碗 39. 染付茶碗 40. 高台付摺鉢

発掘調査出土遺物 ⑤

図版 21



ジニⅢ 715 41



ジニⅢ 190 45



ジニⅢ 622-1 42



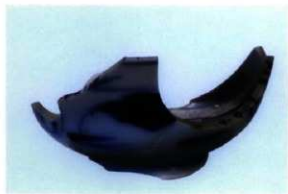
ジニⅢ 691 46



ジニⅢ 131 43



ジニⅢ 654-1 47



ジニⅢ 644-2 44



ジニⅢ 470-5 48

41. 土管 42. 高台付染付碗 43. 灰釉の碗 44. 染付碗
45. 灯明皿 46. 染付湯呑碗 47. 染付皿 48. 染付型押の皿

発掘調査出土遺物 ⑥



ジニⅢ 465 49



ジニⅢ 278-6 53



ジニⅢ 729 50



ジニⅢ 260-5 54



ジニⅢ 552 51



ジニⅢ 606-2 55



ジニⅢ 235-4 52



ジニⅢ 746-1~7 56

49. 染付皿 50. 湯呑茶碗 51. 盃 52. 青磁盃
53. 徳久利 54. 湯呑茶碗 55. 皿 56. 皿

発掘調査出土遺物 ①

史跡高遠城跡二ノ丸便所建設事業

史跡高遠城跡二ノ丸Ⅲ

埋蔵文化財緊急発掘調査報告書

平成8年3月

発行 高遠町教育委員会

印刷 機才ノウエ印刷

長野県諏訪市中央586

